
くすぐり天国・甘甘地獄

リミックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くすぐり天国・甘甘地獄

【Nコード】

N0483Z

【作者名】

リミックス

【あらすじ】

有人くんが妹の三久ちゃんにくすぐり犯され虜になっちゃう・・・という話です。

初夜（前書き）

くすぐり好き、またはくすぐられるのが好きという方にはおすすめです。

初夜

三久ちゃんの部屋の前に来た、

僕は軽くドアをノックする。

「三久ちゃん、もう寝ちゃった？」

直後、部屋の中からどたどた足音が聞こえる、

どうやら慌てて跳び起きたようだ。

ガチャッ

ドアの隙間から三久ちゃんが覗く、

瞬間、歓喜の表情でドアを開く。

「きゃっ、有人おにいさまっ！私、うれしいですっ！！！」

僕に飛びつき、そのまま部屋の中へ引つ張る。

つられて中へ入る、とってもかわいらしい部屋だ。

パジャマ姿の三久ちゃんも、とってもかわゆい。

「おにいさまっ！！！！」

僕の胸に顔をうずめ、

そのまま僕の体をぎゅっと抱きしめる。

「うれしいですう、だって、三久、三久・・・」

純粋な、心から嬉しそうな声だ。

「三久ちゃん、まあ落ち着いて・・・ね、ちょっと座っていい？」

「あ、はい！」

僕と三久ちゃんは部屋の真ん中で向かい合って座った。

いかにも子供らしく、可愛いらしい三久ちゃん・・・

13歳ってことは、Hどころかキスすらしたことないかも？と思える。

「おにいさま、今夜一緒に寝てくれるんですね？」

「う、うん、もちろん・・・」

「・・・それじゃあねえ、寝る前に遊んでくれる？」

遊ぶ・・・？

やっぱりまだまだ子供だ、無邪気なもんだ、

適当にじやらせてあげれば、気が済むだろう。

僕はたまらず身悶える、

三久ちゃんはくすぐりの手をやめない。

[illegible]

「あは！あは！あははははは！！！」

かわいらしい両手が僕の脇腹を執拗にくすぐる。

「はははははは……やったな、こらあ！ はははははは……」

なるほど、可愛らしい遊びだ、

僕もくすぐり返そうと三久ちゃんの体に手を伸ばす。

「おにいさま、甘いですう」

その瞬間、三久ちゃんの手が僕の脇の下に潜り込み、
さらにくすぐりを速めた。

「ひやははは！み、三久ちゃん、や、やめて・・・ひやはははははは！」

仕返ししようとしたのだが、

僕の攻撃を巧みにかわす三久ちゃんに、

なんとか必死に防衛しようとするのに精いっぱいな僕。

しかし三久ちゃんは一向にくすぐりをやめようとはしない。

「あははは・・・はは・・・は・・・もう・・・あは・・・やめ・・・
・・・ははははは・・・」

段々しんどくなってきた。

三久ちゃんは僕の脇腹や脇の下はもちろんのこと、

太股や背中、足の裏から首筋まで、

可愛らしい二本の手をまるで蜘蛛のように素早く激しくくすぐる。

「ははは・・・も、もう・・・あ・ははははは・・・」

しつこい、あまりにもしつこすぎる。

はじめのうちはじゃれてきてるだけだと思っていたが、

ここまでしつこいといいかげんにシヤレにならなくなってきた。

もういい、もうさすがに耐え切れない、

と三久ちゃんを払おうとしたが、まだまだ続く激しくすぐりに、

僕は手が出せなくなっていた。

「ははは・・・ははは・・・ははははは・・・」

「ふふふ、おにいさまかわいい！ふふふふふ・・・」

僕はだんだん顔が青ざめていた。

こんなにすぐられ続けたのは生まれてはじめてだが、

とにかくしんどい、もう笑い声も途切れ途切れでただただ身悶えるしかない。

「おにいさま、くすぐられるのも刺激的でしょう？ほら・・・ここちよこちよこちよ・・・」

「ひ・・・ひ・・・はははは・・・ぎやははは・・・」

息も絶え絶え、頭は真っ白、涙と涎が止まらない。

僕は窒息し、体は痙攣しはじめた。

「はい、遊びおしまい」

三久ちゃんはようやく手を止めた、

しつこい、あまりにもしつこすぎるくすぐりがやっと終わった。

「・・・はあ、はあ、はあ・・・」

僕は汗だくで身動き一つとれない、

トライアスロンを終えたような完全に体力を奪われた状態だ。

・・・あのままだったら、間違いなく窒息死していただろう。

「・・・み・・・はあ・はあ・・・み・・・」

三久ちゃんに話かけようとしたが、

笑いすぎたため体も心も口も疲れきってしまい、

はつきりとした言葉を出すことができない。

「おにいさま、とってもよかったでしょ？ほら、その証拠に・・・」

三久ちゃんはそつと僕の股間を触る。

「あっ・・・！！！」

僕のモノはしつこくくすぐられたことによって、

激しく勃起していた。

くすぐられて勃起するなんて・・・

と思つた間際に三久ちゃんに触られ、

思わず情けない声を上げてしまった。

「・・・はぁ・・・はぁ・・・う・・・」

はぁはぁと肩で息をしながらぐったりしている僕、

ゆっくりと僕のモノをパジャマごしにいぢる三久ちゃん、

僕はその電流のようか快感に体を震わせる、

体力を全て奪われ力を入れようとしても入らないからだ。

「み、三久・・・ちゃん・・・何を・・・」

少しずつ息を整えようと必死な僕に、

三久ちゃんは可愛らしく、悪戯っぽく話す。

「おにいさま、遊びはここまでです、

これから本番です、本格的にくすぐって気持ち良くしてさしあげます」

三久ちゃんの両手が再び僕に延びた！！

「おにいさま、こちよこちよこちよこちよこちよこちよ・・・」

「ひ、ひ、ひやはははははははははははははははは……」

また始まる激しいくすぐり、

今度は本格的に体中をさらにくすぐる。

疲れきっていた僕をさらになぶるような、残酷なくすぐり……

「や、や、きやはは・・・は・・・やめ・・・は・・・ははは・
・・・」

僕の脇の下、首筋、耳の後ろ、太股、背筋、

ありとあらゆる敏感な部分を、

丹念に素早く確実にくすぐり続ける。

「おにさまあ、いいでしょ？いいでしょ？くすくすくす」

「……あ……は……あ……あ……あ……」

「おにいさま、目がイッちゃってるー、かわいいっ！こちょこちょこちょ・・・」

僕は白目をむいて体を激しく反らせている、

油汗が大量に流れ出し、体に力が入らない、

このリンチのような強烈なくすぐり攻めにつめき声すらも枯れだした。

だめだ！このままでは気が狂ってしまっ！

僕は大量の涎を垂らしながら三久ちゃんに懇願する。

「やみえ・・・おにえが・・・はああ・・・は・・・は・・・み・・・ああ・・・」

体中を駆け巡る凄まじいくすぐったさに言葉にならない、

それを察知したのか、まるでとどめをさすように、

三久ちゃんは僕の一番敏感になっている部分をくすぐりだした！

「あうっ！！！」

僕はひととき大きな叫び声を上げた、

激しく長くくすぐりの感覚で激しくいきり立っていた僕の股間を、
そのかわいい右手でくすぐりはじめたのだ。

「おにいさま、ぴくぴくしてるう」

三久ちゃんの右手が僕の敏感なペニスの頭の部分から竿、袋と、
小さく、細かく、念密にくすぐる。

左手では僕のあごの下をくすぐり、
身動きが取れないようにくぎを刺している。

「あ……あ……あ……！！！！」

三久ちゃんの小刻みな股間へのくすぐりが、段々強くなる。

そのかわいらしい右手が僕のモノを「くすぐる」から「こする」、そして「しごく」になってきた。

「あっ！あっ・・・ああっ！！」

「おにいさま、イツちゃいましょう、さあ！」

顎をくすぐっていた左手も股間に下ろし、両手で僕のモノを攻める。

「やめて・・・ああっ！だめ、ああああっ！！！！」

「うふ、さあ、くすぐりの世界へ墜ちちゃいましょう、やみつきになっちゃうんだから！」

「あ、ああ、あああああ！！！！！！」

ぴゅーーーーーっ・・・

僕のモノはびくん、びくんと激しく射精をした、

生まれてから最高の、今までに無い強烈な快感、噴射・・・

鯨が潮を吹くように、白い精液が真上に大量に飛んだ。

「きゃっ、出たっ!!」

「あ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・ああああ・・・・・・・・」

放心状態で気が遠くなっていく僕の耳に、

三久ちゃんの声をはるか彼方から聞こえた。

「うふふふふ・・・おにいさま、まだまだこれからですからあ・・・

たっぷりと、一生離れられなくなるぐらい、くすぐってあげるんだから・・・」

初夜（後書き）

続けますのでよろしくお願いします。

2日目「1」

「ただいま・・・」

2日めの夕方、僕は美麗家に帰ってきた。

転校初日だったが、ほとんど勉強に身が入らなかった。

ゆうべのあの出来事・・・

僕はあのまま気絶してしまい、

気がつくと朝になっていた。

三久ちゃんの姿はすでになく学校へ出かけたあとだったが、

僕のからだはきれいにタオルで拭かれた形跡が残っていた、

一美さんは知らないと言っていたのでおそらく三久ちゃんがしてくれたのだろう。

しかし、あの壮絶なくすぐりの感触はまだ鮮明に僕の体に残っており、

学校でもなんだかむずむずして、ちっとも先生の話など耳に入らなかった。

あの感覚・・・くすぐられてイカされる、信じられないほど凄まじい快感・・・

それを思い出すたびに僕の背筋に寒気が走り、股間は熱く硬くなり、

なんとか気を静めようと精いっぱいだった。

三久ちゃんがあんなことをするなんて・・・

三久ちゃんにあんなふうにイカされるなんて・・・

三久ちゃんにあんな快感をすり込まれるなんて・・・

僕はふらふらと三久ちゃんの部屋へ吸い込まれるように入る、

あいかわらず可愛い部屋・・・

まだあの夜の余韻が残っているように思えた。

僕は学生服から普段着に着替える、

部屋に充満している三久ちゃんの香りが僕の鼻をくすぐる。

「三久ちゃん……」

僕は気がつくともベッドの中へ入っていた、

昨夜の疲労が後を引いていたこともあるが、

あのくすぐりの感覚が僕の脳裏に鮮明に蘇ってきたのだ。

「……はあ……はあ……はあ……」

無意識の内に僕は自分のモノをしごいていた、

忘れられない快感を思い出しながら、

三久ちゃんの匂いの染み付いた布団にくるまって……

「……み……くちゃ……ん……はあ……はあ……」

学校ですつと我慢していた分、

辛抱できなくなった僕は自慰行為にふける。

「・・・あんなこと・・・するなんて・・・はあ・・・ああ・・・」

始めてから30分・・・やけに長い。

汗だくになりながら自分のモノをしごくのだが、

興奮はしているものの、なかなか絶頂に達することができない。

「・・・み・・・三久ちゃん・・・あああっ！！！！」

ようやくいくことのできた僕は、

疲労からかそのまま眠りについてしまった。

「……さま……」

「……おにいさま……」

「……有人おにいさま……」

何度も僕を呼ぶ声に、意識が戻る。

この可愛い声は……

このくすぐったい声は……三久ちゃんだ。

「おにいさまあ、もうすぐお食事の時間ですう」

もうそんな時間が、

と起きようとしたが、体が引っ張られて起き上がれない。

なぜ？と見回してみると、僕はいつのまにか全裸にされており、

両手両足が黄色いリボンでベッドの柱にしっかりと括りつけられている、

これでは身動きがとれないはずだ。

「おにいさまあ、パンツ汚しちゃって、いけないんだあ」

セーラー服姿の三久ちゃんが、

僕に寄り添い左手で股間をやさしくなでる。

「うつ・・・三久ちゃん・・・」

「だからあ、おしおきしちゃうんだから・・・」

トローンとした目で僕の太股に馬乗りになる三久ちゃん、

右手に持っているのは・・・耳かきだ。

「このふさふさしてるとこ・・・くすぐったそうでしょ？」

耳かきの後ろについている梵天^{ぼんてん}を、

僕の目の前に近づける。

「三久ちゃん・・・まさか、それで・・・」

「ふふふ・・・お・し・お・き」

つ、つーっつと梵天を僕の首筋に這わせる。

「あああっ！・・・くうう・・・」

予想以上のくすぐったさに身をよじるが、

しっかりとベッドに括られたリボンが僕の手足を押さえつけて動けない。

「おにいさま、すっかり敏感になってる・・・ゆづべたっぷりくすぐったから・・・」

確かに僕の体はくすぐりに過剰に敏感になっているようだ、
どうやらゆづべのあれで三久ちゃんに感じやすい体にされてしまっ
たらしい。

「こっちも・・・どうかなあ？」

「はああああ・・・あう・・・」

梵天が首筋から左耳の方へと動き、
さわさわつと微妙にくすぐられる。

「あ・・・あ・・・ああっ・・・」

いつのまにか三久ちゃんはまだ一本耳かきを手にし、
両手の梵天で僕の両耳を同時にくすぐる。

「はああっ！・・・くす・・・ぐったい・・・や、やめて・・・」

僕が少女のような細かい悲鳴をあげると、

すっかり主導権を握っている三久ちゃんはさらに悪戯っぽい表情で、

梵天を降ろしていく。

「おにいさま、こことか・・・いいでしょ？あと、ここも・・・」

「あう・・・ああ・・・はああ・・・」

梵天は僕の脇や胸、お腹を縦横無尽に這っていく、

僕は恥ずかしいこととはわかっていても、

自然とあえぎ声が漏れてしまう。

ゆうべと比べてずいぶんやさしくすぐりのはずなのだが、

僕の体がほぐされたためというか、あの夜の後遺症が残っていると
いうか・・・

愛撫にも似たこのくすぐりに僕はもうめろめろ、我慢できなくなっていた。

「お願い、やめ・・・やめて・・・もう、駄目・・・はあああ!」

「おにいさま、ここが弱いからね・・・」

梵天が僕の両乳首をやさしくくすぐる、

全身を今までにないほどの快感が駆け巡る。

「うふふふ・・・くすぐられるのって、気持ちいいでしょ？」

くすぐったさって、つまり、強い快感なんですって・・・」

「あああああああ・・・はあああああ・・・」

執拗に乳首を攻める三久ちゃん、

僕の頭はぼーっとしてその快楽に浸るしかなかった。

「おにいさま、どう？気持ちいい？」

「は．．．はあ．．．あ．．．．．」

「すごい気持ちいいみたいね．．．じゃあ、ここを．．．」

「あ．．．ああ！あああ！！」

乳首をいぢっていた2つの梵天が、

僕のすっかりそそり立ったペニスを襲った。

すっかり開いたカ리를、敏感にむき出しになっている亀頭を、
玩ぶようにくすぐりはじめる。

「こちょこちょこちょ．．．いい？いいでしょ？ねえ、おにいさま
あ」

「はあう！やめて．．．三久ちゃん．．．おかしく．．．くっ．．．
なっちゃ．．．うう．．．」

「いつちやいそう？イきたい？でもこのままじゃいけないよお、う

ふふ」

確かにやわらかい梵天のくすぐりは、

僕の性感を果てしなく高めていくものの、

射精に至るほどの刺激にはもう一歩足りないものだった。

「イきたいでしょ？おにいさま・・・イきたかったら、素直に・・・

『イかせてください』って言うてくださいい・・・」

「そんな・・・はああう！」

「そしたら、もっとすごいことして・・・

もっと気持ちいいことして、イかせてあげますう・・・」

僕にはこの凄まじい快感を長時間、

身動きとれずしかもイけないまま生殺しされている状況で、

三久ちゃんに逆らう気力などもう残っていないかった。

僕は顔を真っ赤にしながら三久ちゃんに弱々しい声でねだる。

「お願い・・・三久ちゃん・・・イ、イかせて・・・・・・・・」

「イかせてください、でしょ？」

「イかせて・・・くださあ・・・ああっ・・・いいいい・・・」

「・・・まあいいわっ・・・おにいさま、じゃあいきますよ・・・
すごいんですからあ・・・」

ペニスをくすぐっていた2つの梵天のうち1つが、

そのまま下へ降りていった。

「はああっ！そ、そこは・・・ああああっ！！」

「ここ、いいでしょー・・・こちょこちょこちょ・・・」

三久ちゃんは指の腹で耳かきの軸を回しながら、

梵天で僕のお尻の穴をくしゅくしゅとくすぐる、

お尻の穴から強いくすぐったさ、激しい快感が襲う。

「だめ・・・そんなところ・・・イ、イっちゃうよ・・・」

「ね、すごいでしょ？おにいさま・・・」

ペニスに残っていた方の梵天も、

激しくくすぐりを尿道の方に集中させて射精を促す。

「だめだ・・・僕、こんなのでイっちゃったら・・・ああっ、もう・・・あああ！・・・」

「おにいさま、さあ、おにいさま！・・・」

「あああ！・・・」

お尻の穴と尿道の攻めがさらに激しくなり、

僕の頭は真っ白になり、そしてついに・・・

「うっうっ」

ぴゅっ、どぴゅーっ……ぴゅっ……ぴゅっ……

昨夜と同じように、またも激しい射精……

おなかに飛び散った白い精液、

三久ちゃんはそれを満足そうに眺める。

「ふふ、おにいさま……とってもよかったでしょ？」

どこからか濡れたタオルを持ち出し、

丹念に僕のペニスやお腹についた精液を拭き取ってくれる。

はあはあと放心状態の僕に、

三久ちゃんはそっとやさしく唇を重ねた。

「ん・・・ん・・・んぐ・・・」

ぴちゃぴちゃと僕の舌をなめる三久ちゃん、

僕はその快感に身を任せる。

やがて唇を離すと、手首を縛っていたリボンを解いてくれた。

「さ、おにいさま、晩御飯ですっ」

すっかりご機嫌な三久ちゃんは、

なんとか体を起こした僕となりで、

セーラー服を脱ぎ、普段着に着替えだした。

僕にも新しいシャツとパンツ、ズボンを渡し、

着替えを手伝ってくれる。

「行きましょう、はやくう」

三久ちゃんはふらふらになってまともに歩けない僕の体を、
気遣って支えてくれながら一緒にキッチンへ向った。

2日目(2)

あら、仲がいいのねえ、羨ましいわあ」

キッチンで僕を待っていていた一美さんが、

寄り添う僕と三久ちゃんに嬉しそうにそう言った。

「遅いよ、すっかり冷めちゃったじゃないか」

逆に二恵さんは不機嫌そうだ。

「ごめんなさい、おにいさまがなかなか起きなくってえ」

三久ちゃんは僕をイスへと誘導すると、

三久ちゃんのイスの前にある夕食を僕の方へ移動させ、

僕の前には2人分の食事が並んだ。

「私、ここで食べるねえ」

僕の膝の上に、

三久ちゃんがちょこんと座る。

「三久ちゃん!？」

「いただきまーす!」

目の前の食事をぱくぱく食べはじめる三久ちゃん、

それを見て夕食を開始する一美さんと二恵さん。

「ちょ、ちよつと三久ちゃん・・・」

「おにいさま、はい、エビフライ」

「あ、ありがと・・・んぐ・・・ん・・・」

三久ちゃんの箸から運ばれたエビフライを頼張る僕、

あきらめてご飯のお碗を手にする。

それを見て、一美さんが嬉しそうに話し掛けた。

「有人さまったら、すっかり三久と仲良くなって・・・嬉しいですわ」

珍しく二恵さんも口を開いた。

「よかったな、三久、有人さんとやらがロリコンで」

「な・・・!？」

僕はご飯を喉につまらせそうになった。

「おにいさま、お茶、お茶！」

「ん・・・くくくく・・・ぷはあ、ありがとう、三久ちゃん」

僕はもう何も言わず、食事を続ける、

三久ちゃんの髪の毛が僕の鼻をくすぐる、

と同時に、僕の上に座っている三久ちゃんのお尻が、

微妙に動くたびに僕の股間を刺激し、むずむずしてきた。

「その・・・三久ちゃん・・・」

「なあに？おにいさま・・・むぐむぐ・・・」

「あの・・・その・・・どいて・・・もらえないかなあ」

「えー？おにいさま、私のこと、嫌いになっちゃったの？」

「いや、そうじゃないけど、その・・・」

—美さんが口を挟む。

「三久！有人さんが困ってらっしゃるじゃないの！」

「だつてえ……」

二恵さんも口を挟んだ。

「何、子供相手にムキになってんだよ……いいじゃないかよ」

ただの子供だつたら確かに良かったんだけど……

こ、股間が……ああ……

「おにいさま、駄目なお？」

上目遣いで僕を見つめる三久ちゃん、

断つたら……あとが怖い……

「い、いいよ、大丈夫だよ、うん、やっぱり・・・」

「わーい！おにいさま、大好き！」

三久ちゃんはお尻をさらに深く腰掛け食事を続けると、
僕の膨らんだ股間がさらに圧迫される。

「うつ・・・」

「いいんですか有人さま？」

「一美さん、心配しないでください、本当に・・・」

僕は震えながらもなんとか食事を終えた、

三久ちゃんもほぼ同時に食べ終える。

「しゅちそうさまでしたー」

三久ちゃんがようやく僕の膝から降りる、

何度、股間が漏れそうだったか・・・

「おにいさま、一緒にお風呂入りましょうよ」

「ええっ!？」

その突然な提案に、

僕は目を丸くして驚いた。

「お風呂って、一緒に!？」

「はい、一番風呂よ、一緒に、ね？」

「そ、それはいいよ、やっぱり、ほら、まずいだろ?だって・・・」

「えーーーーー!?!おにいさまぁ・・・」

まずい！逃げよう！！

「僕、トイレに行ってきます！！」

「おにいさま！！」

僕は慌ててトイレに駆け込んだ。

……冗談じゃない、一緒にお風呂なんて入ったら、

どんな目にあわされるか……

でも、今夜も一緒に寝なきゃあいけないんだろうなあ……

まずい……三久ちゃん、怒ってるだろう……

どうしよう……どんなお仕置きが待っているか……

気が狂うまでくすぐられるに違いない……

そんなことを考えているうちに、股間の疼きが大きくなってきた。

．．．．．そういえば、さっきから刺激されっぱなしだったもんな．
．

僕はその場で一度出してなんとか静めようと、

自分のモノをしごきはじめる。

「．．．．．はあ．．．．．はあ．．．．．はあ．．．．．はあ．．．．．」

自然と昨夜のこと、そして今日、ベッドでされたことを思い出す、

僕のモノは興奮し、射精の寸前まではすぐに達する、

しかし、あと一押し、もう一歩のところまでいくところまで行かない。

「なんで．．．．．はあ．．．．．はあ．．．．．う．．．．．はあ．．．．．はあ．．．．．」

あれだけ強烈な快感を浴び続けたのに、

どうしていけないんだろう？

・・・さてよ、だからこそ、もう自分一人では・・・！？

恐い考えが浮かんだとともに、

トイレのドアを蹴る音がした。

「おい、まだ入ってるのかあ？」

二恵さんの声だ、早く出よう。

ガチャ

「ごめんなさい、どうぞ」

「あんた、まだ入ってたのか？1時間はたってるぞ」

自慰に熱中している内に、

いつのまにかもうそんなに時間がたっていたようだ、

廊下で一美さんとすれ違う。

「あら、有人さま、三久はもうお風呂出ましたわよ、次どうぞ」

「あ・・・ありがとうございます」

まずいことしたかなあ、

と軽く後悔しながらお風呂へ入る、

湯船に三久ちゃんの髪の毛が浮いている。

「・・・・・・・・三久ちゃん・・・」

昨夜のあのハードなくすぐり攻撃、

そして今日のあの耳かきの後ろを使っのくすぐり攻撃、

食事中のお尻での攻撃……

無邪気に僕を犯す三久ちゃん、

僕は……僕は……

ズキン、と股間が疼く、

まだ僕の体にあの感触が確に残っている、

あいかわらず起ったままの自分のペニスをしごく、

僕は再び自慰行為にふけいった。

しかしあいかわらずいつまでたってもイくことはできない、

気付くとすりガラスごしに人影が見える……

まさか、三久ちゃんじゃあ!?

「おい、まだ入ってるのかあ?

風呂まで長いのかよ、もう2時間以上になるぜ」

「ごめんなさい、すぐに出ます！」

あわてて湯船を出たが、

頭がボーっとしてクラクラする、

体はすっかり茹ってしまった。

ヨロヨロになりながらも、

なんとかパジャマを着て風呂出る、

勃起したままの僕のモノが少し邪魔で歩きにくい・・・

居間で髪を乾かせながら、あたりを見回す、

一美さんがアイロンをかけているだけで、三久ちゃんは見当たらない。
い。

「あの、三久ちゃんは・・・」

「もう寝ちゃったわよ、だって、ほら・・・」

時計を見ると、もう夜中の11時すぎだ、

やばい・・・三久ちゃん怒ってるだろうなあ・・・

お仕置き・・・今日のお仕置きでさえあれだけ強烈だったんだから、

今夜は何をされるか・・・

「あの、一美さん、僕、今日は一美さんの部屋で寝るっていうのは・・・」

「それは駄目ですわ、だって最初に三久の部屋を選んだんでしょ？」

着替えとか学校の道具とか、もう三久の部屋に移動させてありますから・・・」

これはもう覚悟を決めるしかない・・・

こんなので僕、あと5日もつかなあ・・・

そんなことを考えながら三久ちゃんの部屋の前に来た。

「・・・三久ちゃん？」

返事はない、僕は静かにドアを開けた。

ガチャッ

部屋に入ると、

三久ちゃんの可愛らしい寝息が聞こえる、
ベッドの中にくるまって眠っているようだ。

「もう、寝ちゃったの？」

静かに近づくと、

三久ちゃんの表情が見えた、

頬に涙が通った後の筋が2本・・・

「ごめんね、三久ちゃん・・・」

そう語り掛け、僕も同じベッドに入る。

僕のモノも眠れば静まるだろう、

そう思いながら目を閉じ、夢の世界へ落ちていった・・・

3日目「1」

「ただいまぁ・・・」

3日めの夕方、僕はすっかり調子を崩していた、

僕の勃起したモノが、一向におさまらないのだ。

朝、目覚めると三久ちゃんはすでに学校へ行ったあとだった、

僕は朝食のときも、登校時も、授業中も、ずっと勃起したままで、

何度か静めようとしたのだが、まったく萎える気配がない。

僕は昨日と同じように三久ちゃんの部屋へ直行し、

ベッドに潜り込み、三久ちゃんに玩ばれたことを思い出しながら、

自分のモノを懸命にしごく。

「・・・どうして・・・はぁ・・・どうしてなんだ・・・はぁ・・・

」

しかし、何度やっつての結果は同じ、

いくら性感が高ぶっても、射精には到らない。

「三久ちゃん・・・ああ・・・三久ちゃん・・・」

僕の頭の中はすっかり三久ちゃんに埋め尽くされていた、

僕の中で決して考えてはいけなかったと思っていた欲望が、

ふつつと沸いてくる。

・・・三久ちゃんにくすぐられたい・・・

・・・三久ちゃんにいぢられたい・・・

・・・三久ちゃんに犯されたい！！！！

その欲望を必死で振り払おうとするが、

高ぶった性感が妄想を膨らませる、

もしゆうべ、あのまま三久ちゃんとお風呂に入っていたら・・・！

ガチャッ

部屋のドアが開く、

三久ちゃんが帰ってきた、

僕と目が合うと、ぷいと顔を逸らせた。

「おにいさま、嫌い！」

そう言つと、

僕に構わずセーラー服を脱ぎだした。

「ごめん、三久ちゃん、その・・・」

三久ちゃんは僕の話を見無視するかのようになり、普段着に着替えはじめる。

僕の口からは、焦りからか決して口に出してはいけなはずの言葉が押し出された。

「三久ちゃん、今夜一緒にお風呂入ろう？」

「……………本当？」

僕は言った直後、しまった！と思ったが、

三久ちゃんは一瞬にして満面の笑みになり、

純白の下着姿のまま僕に飛びついた。

「わーい、おにいさま、大好き！」

ぎゅっと僕の体に抱きつく三久ちゃん。

「じゃあ、今から入りましょうよ」

「え、今すぐ？だってまだ夕食前・・・」

「今日、私、部活でかなり汗かいて・・・ね、いいでしょ？」

「うん・・・わかった」

僕は後悔を引きずりながら、

べったりくっつく三久ちゃんとお風呂場へ向かった。

「おにいさま、丁度いい湯加減ですう」

裸で湯船に手を入れる三久ちゃん、

僕は脱衣所から三久ちゃんの裸を見ないようにするので精いっぱいだ、

タオルで自分の勃起しっぱなしのモノを隠しながら、

お湯を自分の体にかける。

「三久ちゃん・・・髪の毛洗ってあげるよ」

「本当？嬉しい！」

僕は三久ちゃんをお風呂のイスに座らせ、
後ろに回って頭からお湯をかける。

「あーん、おにいさまぁ・・・」

「しっかり目をつぶっていてね」

三久ちゃんの背中に回れば恥ずかしい部分を見ることがもないし、

僕の恥ずかしいモノも見られる心配がない、

シャンプーを三久ちゃんの頭につけ、

長くやわらかい髪を丁寧に洗ってあげる。

可愛い背中・・・僕は少しムラツとした、

今なら三久ちゃんは目を開けられないはず・・・

三久ちゃんの裸を・・・胸を・・・あそこを・・・見たい・・・

ズキンと僕のモノが疼く。

「おにいさまあ、はやくう」

「う、ごめん、ちゃんと洗わないと・・・ね」

僕はよこしまな考えを振り切り、

三久ちゃんの頭にシャワーをかけ、シャンプーを洗い流し、

後ろから顔をふいてあげた。

「はい、できあがり」

「おにいさまあ、次は体も洗ってえ」

「え？」

「はい、ボディーソープ」

「そ、それぐらい・・・自分で・・・」

「おにいさまあ」

こちらを振り向こうとする三久ちゃん。

「わ、わかったわかった、はい、座って」

慌てて三久ちゃんの体を元に戻し、

スポンジにボディーソープをつける。

「じゃあ、三久ちゃん・・・いくよ」

「はい」

三久ちゃんの背中を丁寧に洗う、

綺麗な肌に磨きがかかる。

「おにいさまあ、背中ばかりい・・・」

「ごめんごめん、わかったわら、前向いて・・・」

僕は緊張しながらスポンジを、

目をそらしながら後ろから回し、三久ちゃんの体を洗う。

スポンジごしながら、三久ちゃんの胸を洗う・・・

かわいいふくらみがしつかりと感じ取れる。

「きゃ、おにいさま、くすぐったあゝい」

三久ちゃんのかわいい声に構わずスポンジで洗い続ける、

首筋、脇の下、おなか、足・・・

足を洗ってあげてる最中にちらつと三久ちゃんおあそこが見えた、

生えはじめていた産毛・・・目に毒だ、

と思った瞬間、タオルで隠していた僕のモノが三久ちゃんの背中に当たる、

思わぬ感触に僕はドキツとすると同時にさらに硬くなった気がした。

「三久ちゃん・・・」

「おにいさまあ、ここも・・・」

三久ちゃんが僕の腕をつかみ、

スポンジをあそこへ誘導する、

僕はまだ湯船につかっていないのに顔は真っ赤だ。

「おにいさまあ・・・」

僕はやさしく三久ちゃんの秘部をスポンジで洗う、

そしておしりも・・・なんとも言えない感触だ、

それをあつという間に終わらせ、三久ちゃんの体にまんべんなくシヤワーをあびせる、

もちろん三久ちゃんの体を正面から見ないように気を使いながら。

「三久ちゃん、はいおしまい、よくできました」

「おにいさまありがとう、次はおにいさまの番ね」

「え？」

おもむろにシヤワーを奪い取り、

僕の頭にあびせてきた！

「うわっぷ！何を！うわ！」

「今度は私がおにいさまを洗ってあげる」

三久ちゃんの両手が僕の頭にかかる、

どうやらシャンプーをつけてくれているようだ、

必死で目を閉じる僕。

「おにいさま、きれいにしましょうねー」

僕はもうじつとしているしかない、

三久ちゃんのなすがままに髪の毛を洗われる、
かなり泡がたってきたようだ。

「さ、髪の毛はおいておいて、続いて体を洗ってあげます」

「い、いいよ、それは自分でやるから・・・」

「じつとしてくださいね・・・」

やわらかいスポンジの感触が、

僕の背中を襲う。

「ひやはは、く、くすぐったいいい」

「そう？おにいさま、気持ちいい？」

「あ、あう・・・あ・・・」

僕はこのくすぐったさに、

なんともいえない快感を憶えていた、

そう、いつのまにかくすぐりに極端に弱い体になっていたのだ、

三久ちゃんのあのお仕置きというか、いや、調教と言つべきだろう、

その調教のせいで・・・

「おにいさまあ、背中でこんなに感じてたら、

こっちはどうなっちゃうの？」

そのまま三久ちゃんのスポンジが、

僕の胸の方へ来る。

「あ・・・ああっ!!」

シャンプーのせいで目が開けられないこともあり、

よけいに体が敏感になっているのだろうか、

胸を駆け巡るスポンジのくすぐったさに、

どうしても僕の口から切ない声がでてしまう。

「とってもいい声・・・おにいさま・・・」

丹念に、丁寧に僕の体中をスポンジでくすぐる三久ちゃん、

僕の腕をつかみ、上げさせて脇の下を洗う。

「あ、あ・・・」

くすぐったくって気持ちいい・・・

僕が素直にそう感じはじめたとき、

さらに激しい快感が僕を襲う。

「あうっ！！！」

「おにいさま、ここも洗わないと・・・」

いつのまにか取られたタオル・・・

隠していたはずの僕のペニスに、

三久ちゃんのスポンジがまとわりつく。

「そこは・・・や、やめ・・・はうっ！！！」

「おにいさま、ずっと我慢してたんでしょ？」

そのくすぐったさ、心地よさに、

どんなにがんばっても一人ではできなかった射精が、

ようやく達しようとする。

「はい、おしまい」

ジャー……

ふいに僕の頭からシャワーがかかり、

僕を包んでいた泡を全て洗い流す、

僕はようやく目を開けることができた。

「三久ちゃん……!!!!」

3日目(2)

目の前には素っ裸の三久ちゃんが湯船の淵に座っていた、
かわいらしい胸、ピンクの乳首、うっすらと産毛が生え揃ったあそ
こ・・・

僕は思わず目を逸らせた。

「はぁうつっ！！！！」

とたん、僕の股間に走る衝撃・・・

見ると、三久ちゃんのかわいい足の指が、

僕のペニスの先をまさぐっていた・・・

「み・・・くちや・・・ん・・・」

「おにいさま、もう我慢できないでしょ？」

昨日から・・・ずっとイけなかったんでしょ？」

全てを見透かしているかのように、

三久ちゃんは淫靡な微笑みで語り掛ける。

「イきたかったら・・・ここ・・・なめてくだあい・・・」

三久ちゃんのかわいい指が、

産毛の下にある秘部をいやらしく広げている、

中は綺麗なピンク色・・・思わず目が釘付けになってしまう。

「おにいさま・・・なめて・・・」

・・・そしたら、イかせてあげる・・・」

「ああ・・・」

三久ちゃんの足の指が僕の亀頭をくすぐる、

頭がぼーっとして、快感に身を委ねる・・・

僕は吸い寄せられるように三久ちゃんの股間に顔をうずめた。

ぴちゃ・・・

ぴちゃ、ぴちゃ・・・

三久ちゃんの秘部へ舌を挿し込む・・・少ししよっぱいような・・・

やわらかくって・・・ぬめぬめしていて・・・吸いつくようで・・・

甘い感覚で・・・僕の鼻が三久ちゃんのうぶ毛でくすぐりたい・・・

ちゅぱ・・・くちゅ・・・ぴちゅ・・・

「おにいさん・・・まあ・・・いいですう・・・とってもお・・・」

一心不乱に三久ちゃんをあそこをむしゃぶりつくす、

奥から僕の脳をとろけさせるような蜜が溢れてくる。

「きゃん！・・・そこ・・・もつと奥・・・ああん・・・」

三久ちゃんの足が僕の首に絡み、

僕の顔はぎゅつと三久ちゃんをあそこに深くはまる、

言われるままに三久ちゃんの膣を深く執拗になめ、

小さなかわいい突起物をころころと舌で転がし、しゃぶる。

じゅる・・・じゅるる・・・ちゅうつ・・・

「おにいつさまっ・そこいい・・・いい・・・あ・・・あ・・・あああっ！！」

体を震わせる三久ちゃん、

僕はさらに強く突起物を吸うと、

三久ちゃんは体を反らせ、太股で一際つよく僕の顔をはさみ、

快楽の絶叫をあげる。

「あ・・・あ、あ、おにいさ、まああああああ——！！！」

秘部の奥から大量の蜜が溢れ、

三久ちゃんはそのままぐったりと力をぬいた、

どうやら絶頂に達したようだ。

「・・・あ・・・ああ・・・ああ・・・」

とろとろとしみ出す蜜、

ぼーっと天を仰いで放心する三久ちゃん、

僕の頭を鎖のように絡めていた足もだらりと下がる、

僕は顔を上げ、とろんとした表情の三久ちゃんに問い掛ける。

「・・・ぶはぁ・・・三久ちゃん、僕、もう・・・我慢できないよ・・・」

ギンギンに反り返った僕のモノがズキズキ疼く、
ずっとイけないまま、破裂しそうに痛い、

実際、破裂してくれた方が楽になるのだが・・・

「三久ちゃん、ねえ、三久ちゃん・・・」

「・・・おにいさま・・・ちゃんと言って・・・」

気を取り戻した三久ちゃんが、

蒸気した顔で小悪魔っぽく微笑む。

それは13歳のまだあどけない表情の上から、

とてもいやらしい表情が入り交じっている。

「三久ちゃん・・・僕の・・・ば、僕の・・・」

顔が真っ赤に火照って熱い、

こんな少女で、僕はとても恥ずかしい言葉を強要されている・・・

だがそれはぼくの興奮をさらに高める要素でもあった、

三久ちゃんに、もっともつといたずらされたい欲望、

何より今、この僕のはちきれそうなモノを、早く快感で解放したい・
・

「おにいさま・・・三久、このままお風呂出ちゃってもいいんだけどお・・・」

そう言いながらも僕のモノを再びかわいい足の指ではじく。

「はあうつつ・・・三久ちゃん・・・ぼくのこの・・・うつつ！！」

僕はもう耐え切れず、恥も外聞もなく、

その場で自分のモノをしごき上げる。

それをじっと見つめる三久ちゃん、

見つめられるのに抵抗を感じながらも必死にしごき射精させようとする僕。

快感が増加し、増加し、増加してすぐにでも射精しそう・・・

なのだが、やはり最後の一線が目に見えない何かで塞がれ、射精できない！

「おにいさまぁ・・・はやく出してよぉ・・・出るところを見せてえ・・・」

余裕の表情で僕をじっと見つめる三久ちゃん・・・

この視線・・・この視線がイけない大きな原因の１つ・・・！？

「はぁ・・・はぁはぁ・・・はぁはぁはぁ・・・」

息を切らせて疲れる僕、

だが僕のモノだけは元気に、鋼鉄のように硬くいきり立ったまま・

もう1秒でも・・・1瞬では早く射精したい!!

「み、三久ちゃん！お願い！僕の・・・ああああ!!」

「きゃっ、おにいさまぁ！」

僕はたまらず三久ちゃんの幼い体に飛びついた！

じゃっぽーん!!

三久ちゃんの体に抱きつくと、

軽い三久ちゃんもろとも勢いあまって湯船に落ちてしまった。

「三久ちゃん！三久ちゃん！」

僕は湯船の中で三久ちゃんにしがみつき、

巨大に膨らんだ僕のモノを三久ちゃんの体にこすりつける、

夢中でこすりつけているので、それが三久ちゃんのおなかなのか、
太股なのか、

興奮状態でわけがわからない。

しかし・・・最高に気持ちいい！

イける！これなら射精できる！！

そう思った僕の体に、

お湯の中から三久ちゃんのかわいらしい指が僕の体中を這いだした
！

」・

三久ちゃんは僕の脇の下、背中、腰、首筋、胸、脇腹を激しくくすぐりながら、

僕のモノに今度は三久ちゃんの方からその可愛い体をかすりつける、

僕の右の太股にまたがり、まだ幼いあそこを擦りつけながら・・・

密着した体は三久ちゃんが腰を動かせば動かすほど、

三久ちゃんのアそこは僕の太股で摩擦し快感に痺れ、

僕のアそこは三久ちゃんのやわらかいおなかで摩擦し快感に痺れる・
・

この至高の快感、何より三久ちゃんのくすぐりと体の感触で、

僕のモノは壮絶な射精感に襲われた！！

「あ・あ・あああああああああ————！！！！！！！！！！
」！

「あん、お、おにいさまあ————！！！！！！！！！！
」

ぴゅー―――――………

激しい勢いで、まるで普通の尿のように精液が吹き上がる。

丸一日、じらしにじらしぬかれた僕のモノからどくどくと大量に・

な、
なんという快感……この世にある全ての麻薬でもかなわないよう

めくるめく壮絶な絶頂感……何もかも忘れてしまうような、

脳を真っ白にするその快感に身を委ねる、永い永い射精に……

それをおなかで受け止める三久ちゃん、ほぼ同時にいったようだが、

まだ名残惜しそくに僕の太股にあそこをゆっくり小刻みにこすりつけている。

「おにいさまぁー……こんなに……うふふふ………」

幼くも色っぽい、笑顔で無邪気にくすくす笑う三久ちゃん、

生まれて来て最高の快感に湯船の中で放心している僕。

三久ちゃんはおなかについた大量の白いものを洗い流し、

湯船に浮いた残りの精液もすくって外へ出した。

「・・・・・・・・有人おにいさまあ」

甘えるように再び僕の体に抱きつく三久ちゃん、

僕はただただ呆けたように視点の定まらない目を天井に向けていた。

「おにいさまあ、三久の体、どうだった？気持ち良かったですかあ？」

「・・・・・・・・いい・・・・・・・・これ・・・・・・・・いいよう・・・・・・・・」

まだ快樂の余韻に浸りながら、

うわ言のように三久ちゃんの問いに答えた。

「もっともつと気持ちよくしてさしあげます、これから毎日い．．．」

「．．．あ．．．．．ああ．．．．．ああああ．．．．．」

「どんどん．．．どんどんどん、もっともつと気持ちよくなつていくんだからあ」

そのまま三久ちゃんは半開きの僕の唇にキスをし、むしゃぶりつくように深く深く舌を入れてきた、

今度は僕の口の中へ痺れるような快感が注ぎ込まれる．．．

こうしてしばらくの間、僕と三久ちゃんは互いに余韻に浸ったあと、

ほとんどのぼせてしまった僕を支えながら一緒にお風呂を出た。

あまりにも強烈な長風呂だった．．．．

三久ちゃんはふらふらの僕が服を着るのを手伝ってくれたり、

三久ちゃんの部屋に、まるで負ぶるようにして連れていってくれた、

僕はぼんやりと、三久ちゃんの底知れない体力に感心していた。

夕食を終え、部屋に戻った。

ベットに体を投げ出し横たわる僕、

体中が鉛のように重く、もう動けない。

しかしパジャマに着替えた三久ちゃんはその僕の上にのしかかった。

「三久ちゃん・・・もう疲れたよ・・・寝よう・・・」

「ううん、おにいさま、たまってたんでしょ？だってほら・・・」

「あう！」

まだ半立ち状態の僕のモノをトランクスごしににぎる三久ちゃん、

そつと顔を近づけ、僕の耳にふうつと息をかける、

ぞくぞくぞくつと快感が注ぎ込まれ、僕のモノが硬くなる。

「全部、空になるまでたっぷり搾り取ってあげますう」

「そんなぁ……」

「ほら、こちょこちょこちょ……」

息を吹きかけながら僕の首筋をくすぐる三久ちゃん。

「あぁっ！や、やめて……あぁっ……」

くすぐったさに、あつという間に僕のモノがビンビンになる。

「おにいさまぁ、まだ寝るには早いですよぉ、

私が言ってるんだから間違いありませんー」

「そんな・・・もう疲れたよお」

「うふ、これからはこれが普通になるんですから、

この程度のくすぐりで疲れちゃったら、この先、体力がもちませんよお、

今のうちに慣らしておかないとお・・・」

「え・・・だって、されればされるほど体がくすぐりに弱くなっていくような・・・」

「もう、そんな事言ってる場合じゃないですよ、こちょこちょこちょ・・・」

「ひやははははははは・・・きゃ・・・ああああっ!」

「うふふ・・・ぐりぐりぐり」

三久ちゃんは軽い体を僕の上に乘せて、

右膝で僕のモノをぐりぐりと押しあてながら、

僕の全身をやさしく、ゆっくりとくすぐりだした。

・・・・疲れ果てていた僕はそのまま三久ちゃんにたっぷりもてあそばされ、

4度目の射精とともに精根尽き果ててそのまま眠りについたのであった。

4日目（1）

4日めの夕方、三久ちゃんの部屋。

僕は何だかそわそわと落着かない、

気がつくとも窓から外を覗いたり、玄関まで足が向いてしまう、

まるで母親の帰りを待つ子供のように、僕は三久ちゃんを待っている。

どうしてだろう・・・いつのまにこうなったんだろう、

三久ちゃんに会いたくて、三久ちゃんが待ちどおしくて、

学校が終わると一目散にこの美麗家に帰って来てしまった。

今朝、三久ちゃんは僕のためにお弁当を作ってくれた、

見かけは不格好だったが一生懸命作ってくれたのがわかる、

真心のこもった味がしておいしかった。

そのお礼を言わなくちゃと思い早く帰って来たはずなのだが、

どうも三久ちゃんに対してそれ以上の感情が湧いているようだ。

玄関から待ちに待った声が聞こえてくる。

「ただいまー」

三久ちゃんの声だ！

胸がときどきと高鳴る。

息苦しい、そしてあの可愛い声を聞いただけで、

なぜか体中がムズムズとくすぐつたくなる。

僕はなんとか落ち着こうと深呼吸をした。

ガチャッ

「有人おにいさま、ただいまあー」

満面の笑みで僕の胸に飛び込んでくる三久ちゃん、
それを思わずきゅっと抱きしめる僕。

小さくてやわらかくって、それでいてきゃしゃで・・・
セーラー服や髪の毛から、甘い、いい匂いがしてくる、
こうしているだけで背筋がゾクゾクするほど気持ちいい。

「おにいさまあ、苦しいよお」

「あ、ごめんごめん」

思わず腕に力が入っていたようだ、
僕は慌てて三久ちゃんを放した。

「有人おにいさまあ、そんなに抱きしめなくっても、
三久、どこへも行かないよお」

「うん・・・でもなんか、さあ・・・」

まさか「体が勝手に」とも言えまい。

「私はおにいさまの方が心配なお・・・

ねえおにいさまあ、三久と・・・これから一緒に暮らしてくれる
?」

「うん・・・う、う?」

「本当!?!うれしい!!三久と結婚してくれるのね?」

「ちょ、ちょっと待って!!」

「!?!」

不思議そうな顔をする三久ちゃん。

危ない危ない、

三久ちゃんの勢いにそのまま押し切られるところだった、

我に帰り、僕は落ち着いて話す。

「それはまだ急に答えを出すべき事じゃないんだ、

ほら、とっても大事な事だろう？

だから、じっくりといろんな事を考えて、

僕の人生を決めるんだ、三久ちゃんだってまだ13歳なんだから、

そんなに簡単に、僕と結婚するなんて決めちゃ駄目だよ」

ちよっとむっとした表情になった三久ちゃん、

やばい、また怒らせちゃったかな？と思ったが、

三久ちゃんはすぐに笑顔を取り戻した。

「いいもん、私、絶対有人おにいさまに結婚してもらうんだから！」

いそいそと服を着替える三久ちゃん、

かわいらしい下着につい目が釘付けになってしまっ、

13歳の少女に・・・僕は、あんな事をしてしまった・・・

いや、正確には「されてしまった」のだが・・・

そう思ったびにあの痺れるようなくすぐりの快感が脳裏に蘇る。

「おにいさま！」

ハッと我に帰ると、

三久ちゃんは可愛らしいよそ行きのピンクの洋服に身を包んでいた、

ひらひらのドレス系を少し抑え目にした感じだ。

「おにいさま、これからデートに行きましょう」

「え・・・デート？」

「はい、お買い物です、これから毎日おにいさまのお弁当作ってあげたいから、」

何が食べたいのか一緒に行って教えてください!」

お弁当・・・そうだ、お礼を言わなければ。

「その・・・おいしかったよお弁当、ありがとう」

「嬉しい・・・・・・・・」

素直に目を輝かせる三久ちゃん、

服とマッチして、まるでお姫様みたいだ。

「じゃあ、買い物だけなら一緒に行こうか」

「はい!」

デパートについた僕と三久ちゃん、

歩いている間、ずっと僕の好みの食べ物について聞かれたが、特にこれといって嫌いなものも好きなものもない。

それでもあえていうなら「バランスを考えた料理」を食べたいという程度である、

三久ちゃんは結構頭を悩ませていたが、一生懸命作ってくれた料理に優るものはないだろう。

「おにいさまあ、ちょっと先にこっち」

食料品売り場とは見当違いの方向へ足を進める三久ちゃん。

ここは・・・文房具売場だ、結構いろんな物が揃っている。

「三久ちゃん、何を買うの？」

「ふふ・・・これですう」

その手には、何本ものいろんな太さの筆が並べられていた。

毛先が太いもの、細いもの、やわらかいもの、ハケみたいになっているもの・・・

「こんなに買うに?。」

「はい、絵を描くにはいろんなタイプの筆が必要ですからあ・・・」

そう言いながら毛先をなぞる三久ちゃん、

少し妖しい表情だ・・・僕はどきっとしてしまった。

あの表情・・・三久ちゃんに耳かきの後ろでくすぐり攻めをされた
時を思い出す、

あれであれだけ壮絶なくすぐったさに襲われたのだから、

もし三久ちゃんがこれを使って・・・

だ、駄目だ!すぐにこんな事を考えてしまう、

また股間が熱くなってきた・・・こんな場所で・・・

これじゃあまるで動物だ・・・

「これとこれと・・・これとお・・・これ！」

三久ちゃんは筆だけではなく普通に絵の具も選んでいる、

僕は少し考えすぎていたようだ、

何でもかんでもそういう風に考えるのはよそう・・・

「おにいさま、次は今晚の夕食と明日のお弁当を買いましょう」

三久ちゃんは画材道具を買うつと、

何もなかったように食料品売り場へ向かう。

こうして普通にしていると間違いなく、

まだあどけない年相応の13歳の少女にしか見えない。

他人から見れば、まだキスすらしてないと思うのはもちろん、

Hなことなんてまだ全然知らない・・・と信じて疑わないだろう。

少し駆け出す三久ちゃん、

一つの束ねた自慢の長い髪がふわりと浮く。

まるで妖精のように可憐でとびきり可愛い・・・

「おにいさま、はやくはやくー」

こんな元気で汚れを知らないように見えるお姫様が、

夜になるとあんなに変わるなんて・・・

いや、無邪気なまま、あんな事をするなんて・・・

「ただいまー！ー！」

「あらー、おかえりなさいー」

買い物から帰り、

屋敷中に響くような大きな声をあげる三久ちゃんに、

奥から一美さんが言葉を返した。

僕は山ほどの食材をかかえ、キッチンへ向う。

「おにいさま、私、先に部屋へ帰って着替えてきます」

「うん、じゃあ僕もこれを置いたらすぐ行くよ」

「いえ、三久、一美おねえちゃんの夕食のお手伝いしますから」

「そうなんだ・・・」

「だからおにいさまは、荷物を置いたら三久の部屋かリビングで待っててください!」

「う、うん・・・」

階段を駆け上がる三久ちゃん、

後ろ姿をぼーっと見てしまう・・・

このまま、三久ちゃんのものになっちゃうのも、悪くないかも・・・

「もういいだろ？私、出て行くから！」

「二恵！！！」

キッチンから何やら荒っぽい声が聞こえてきた、

言い合ってるのはどうやら一美さんと二恵さんのようだ、

僕は荷物を持ったままこっそりと2人を覗き込む。

「有人さんとやらが私を選ばなかった以上、もうここに用はないよ」

「なんてこと言うのよ二恵！用がないってどういうことなの？」

「ここにいる必要がないってことさ、だからもう出て行くから」

二恵さんがいらだつように一美さんに言葉を吐きつける、

「美さんもそれに対抗するかのよう言い返す。

「今、一番大事な時じゃないの！みんなで力を合わせて・・・」

「私がすることなんてもないよ、有人さんとやはらは今頃もう三久の虜だろうし、

そうでなくても時間の問題だよ、それに万が一、三久が失敗してても、もう私には関係ないからね」

「関係ないって何いつてるの！？」

「出て行くには丁度良いタイミングだってことだよ、もう明日、出て行くから」

「待ちなさい、二恵！」

あ、2人がこっちへ来る・・・どうしよう・・・

「有人おにいさま、どうしたの？」

「あつ、三久ちゃん！」

いつのまにか僕の背後に三久ちゃんがいた、
薄いピンクのＴシャツに黄色い短パンという、
可愛らしくてラフな格好だ。

「もう決めたんだから・・・あ」

「二恵、いいかげん・・・に・・・」

少しもみ合いながら来た２人は、

僕と三久ちゃんの目の前にやって来た、

目が合って気まずそうな表情になる二恵さん、一美さん、そして僕。

「お姉ちゃん、夕食の材料、買ってきたよー」

「あ・・・そ、そう・・・」

「ま、まあ、三久、それと有人さま、ご苦労様」

三久ちゃんの素直な言葉に、

慌てながらも自然に答えようとする二恵さんと一美さん、

そんな反応に構わず無邪気にキッチンへ走る三久ちゃん。

「有人おにいさまー、はやくー、こっちこっちー」

「う、うん、荷物、すぐに持ってくよ」

「あ、私も手伝いますわ・・・二恵も、ほら！」

「・・・今晚はいらない」

「二恵!！」

逃げるように去っていく二恵さん、

それを戸惑いの表情でおろおろと見つめる一美さん、

そんなこと気付かないかのように料理の仕度を始める三久ちゃん。

僕は荷物を置いて、

三久ちゃんの部屋でぼーっと考える。

僕は・・・ここで何をしてるんだろう？

三久ちゃんにくすぐりで犯されて・・・

まだ結ばれてはいないけど・・・いや、それが不幸中の幸いという
か・・・

僕は三久ちゃんのことを・・・でも、三久ちゃんは・・・

さっき一美さんと言い合ってた二恵さんの言葉も気になる・・・

結局、僕は・・・単なる道具なのだろうか・・・じいちゃんの・・・

そして、この家の・・・！！？

「おにいさまぁー、お夕食、できましたよー」

「あ・・・今、行くよ」

僕は三久ちゃんにまったくすぐられないうちに、

とキッチンへ慌てて急いだ、

そこには一美さんが1人で座っている。

「あれ？三久ちゃんは・・・？」

「三久なら二恵を呼びに行きましたわ」

言ってるそばから三久ちゃんが二恵さんを連れてきた。

「あの・・・二恵さん・・・」

僕の話し掛けにも答えず、

席について無言で食事を始めた。

「いただきますあーーす」

「いただきます」

「い・・・いただき・・・ます」

食事が始まると、

またいつものように一美さんと三久ちゃんの会話が流れる、

今日はデパートで僕と買い物をした話がメインだが、

そんな話など聞こえないかのように一人もくもくと食べる二恵さん、

この家を出て行く・・・つもりらしいが・・・

それにしても三久ちゃんはよく夕食に二恵さんを連れてこれたものだ、

さつき帰ってきたときといい、初日・最初の食事といい・・・

ひよつとしたら、この家を取り仕切っているのは、三久ちゃんなのではないかと思う、

いや、実際そうなのだろう、年齢相応の無邪気さを利用して、

2人の姉をうまく操っている・・・

待てよ、ということとは、

この3姉妹の中で、一番気をつけなければならなかったのが、

三久ちゃんだったという事になる・・・

しまった、見抜けたはずなのに・・・もう、遅いか・・・

僕のからだはもう三久ちゃんのくすぐりに、むしばまれてきている・
・

僕の心も三久ちゃんに奪われはじめている・・・

僕は三久ちゃんのことか・・・ひょっとしたら、もう・・・

「ごちそうさまあー」

「ごちそうさま」

「ごごちそうさま・・・でした・・・」

「・・・・・・・・・・」

食事を終わると二恵さんは何も言わずキッチンを出ていった。

4日目(2)

再び三久ちゃんの部屋へ戻ってきた、

三久ちゃんと一美さんが食事の後片付けと洗い物をしているうちに、

さっさとお風呂に入ってきて出た所だ、

また「一緒に入る」とか言われたら、

たっぷりくすぐられるのは目にみえているので逃げるように先に済ませたのだ、

とはいえこれから素直に一緒に寝てくれるとは思えない、

何より僕のモノがさっきから激しく勃起しているのは・・・

どうしよう、二恵さんが言っていたように、

僕はもう三久ちゃんの虜になってしまったのだろうか、

僕の気持ちはどうなんだろうか、このままこの家に囚われてもいいのだろうか、

・・・いや、僕には断固たる信念があったはずだ、

この家には1週間いるだけで、その後はあこがれの自由を手に入れる・・・

よし、決めた、今夜こそは三久ちゃんを拒もう！

このままくすぐられ続けたらますますおかしくなってしまう、

きちんと三久ちゃんに話して、もうこれ以上Hなことをしないように・・・

・・・だ、だめだ、またあの強烈なくすぐりの感覚を思い出してしまっ、

またズキズキと僕のモノが疼きだした・・・まずい・・・

三久ちゃん来る前にこれをどうにかしないと・・・でも、どうやって・・・

この間みたいなことのくり返しにならないようにしなくちゃ・・・

でも、これが自然におさまるかどうか・・・自分で素早くぬければ楽なんだろうけど・・・

・・・三久ちゃん・・・

そんな自らの葛藤も空しく、

気がつくと僕は悶々と自分の勃起したモノをしごいていた、

部屋に充満している三久ちゃんの香りと、

なによりこれまでのあの鮮明なくすぐりの記憶・・・

はつきりいつて完全に罠にはまっているような感覚だ、

結局はこうしてしまうのも必然なのかもしれない、

そう、こうしていくらしごいてもイけないのも・・・

「・・・はあ、はあ、はやくしなくちゃ・・・三久ちゃんが・・・来
ちゃう・・・」

「早く・・・早くいつて・・・体力を残しておかないと・・・はあ・
・・・はあ・・・」

「疲れて寝ちゃうと・・・また・・・はあ・・・はあ・・・で、でも・
イけない・・・」

ふと視界に、机の上にたててある耳かきが入った、

そういえばこの後ろのふさふさした梵天でくすぐられた時は、

夢のように気持ち良かった・・・僕は思わずその耳かきを手にした。

・・・くすぐられて気持ちいい？

まずい、これがそもそも間違ってるのかもしれない、

くすぐられないとイけない体にされてしまう・・・

僕のからだが完全にくすぐったさでなければ快感を感じなくなった時、

まさしくそれは三久ちゃんの思うが倅なのだろう・・・

僕は手に取った耳かきを投げ捨てた、

あやうくこれで自分のモノをくすぐって射精させようとするところだった・・・

僕のモノもそれを待っていたかのようにさらに快感が増幅されていた、

なんとか・・・しなきゃ・・・なんとか・・・

自慰に集中してなんとか自分の手だけでイこうとするが・・・駄目だ！！

トタトタトタタ・・・

廊下から軽い足音が近づいてくる、

可愛い、恐怖のくすぐり姫の登場だ、

しかも僕の性感が最も高まっている時に・・・

僕は慌ててトランクスを上げ、ベッドの中に潜り込む。

ガチャッ

「おにいさまぁ」

ロリロリした甘い声が僕を呼ぶ、

部屋に入ってきた三久ちゃんから身を守るように、

ベッドの中にくるまって寝たふりをする・・・

「おにいさまあ、震えてるよお」

「!？」

いつのまにか僕は無意識にガタガタと震えていた、

三久ちゃんのあのくすぐり地獄をたつぷり味わった体が勝手に・・・

僕はベットから跳び起きる、三久ちゃんは風呂上がりでＴシャツにパンティ１枚という格好だ。

「み、三久ちゃん、あ、あのさあ」

「おにあさま、声が裏返ってるう」

「い、いや、あの」

「どうしたんですかあ？そんなに慌ててえ」

「その、みみみ三久ちゃん、その、やめてもらえないかな」

そんな言葉も無視して三久ちゃんは微笑みながら近づいてくる、

その表情・・・少し恐い微笑みに見える、

まさに「小悪魔」という表現がピッタリだ・・・

「おにいさまあ、何をやめてほしいんですかあ？」

「ち、近寄らないで・・・ひっ！！」

僕は涙目になりながらベットの上で後ずさりし背をカベにつける、

両手を突き出して首を左右に振り、三久ちゃんの恐怖におののく。

くすぐられる・・・地獄より辛いあの気が狂うくすぐり攻めが！！
！

「おにいさま、飛び出てるっ」

三久ちゃんの視線が僕の股間へ・・・そこには・・・

僕の勃起したモノがトランクスの袖から突き出ていた！

「あ、あう、あ」

しどろもどろになりながら股間のモノをしまおうとすると、

三久ちゃんはその隙を見逃さずネズミを捕らえる猫のように飛びついてきた！

「ああっ！！」

「おにいさまあ」

僕の両腕・両足の間にガバツと入り込み、身を沈める三久ちゃん、

頬を僕の胸にこすりつけて甘えてくる、お風呂上がりの石鹸の匂い・

そのまま右手の指を僕の首筋に這わせた・・・

「ねえ、有人おにいさまぁ・・・」

「あああああ」

耳元に口を吐息が直接入ってくるほど近づけて妖しく囁く三久ちゃん
の言葉と、

やさしく撫でられる首筋の快感に全身の力が抜け、体の震えが止まらない・・・

体に力がまったく入らない・・・今にもちびつてしまいそうだ・・・

「おにいさまぁ、そんなこと言ってえ・・・実は期待してたんでしよう?」

「あ・・・あ・・・いやぁ・・・」

「私はおにいさまが嫌がる事なんてしませんよぉ、本当に嫌がる事なんかぁ・・・」

「そ、そんなぁ・・・」

「・・・期待してたんでしょう?ね?正直に言うてくださあい」

ぞくぞくと吐息を耳に注ぎながら囁く三久ちゃん、

僕はもう抵抗できず、まさに三久ちゃんの思うが俛の状態だ。

「み、みみ、三久ちゃん！」

「きゃん！」

僕はなんとか力を振り絞って三久ちゃんの体を放す、

しかし自分では突き飛ばすぐらいの力を入れたはずなのに、

三久ちゃんは僕と少し離れただけだった、

僕は慌てて三久ちゃんに話し掛ける、

なんとかこの場をごまかさないと・・・

「み、三久ちゃん、あの、その・・・」

「なあに？おにいさま」

「そ、その、お話しようよ」

「おはなしい？」

「う、うん、ちゃんとまともにお話することってあんまりなかったよね？だから・・・」

ぼーっとしかけた意識の中で三久ちゃんに語り掛ける僕、

三久ちゃんは僕の膝の上に跨り、両腕を僕の首の後ろにまわして軽く体重をかけた。

「おにいさま、嬉しい・・・三久とお話したいだなんてえ」

瞳をうるうるさせて僕を見つめる三久ちゃん、

心の底から嬉しそうな微笑み・・・

・・・いけない、油断してるとまた・・・！！

「三久ちゃん、あ、あのさ、学校・・・楽しい？」

「うーん・・・楽しいけど、ちょっとたいくつ、かなあ」

「好きな授業とかは？」

「んつとねえ・・・体育かなあ」

「そ、そういえばいつも部活で運動してるみたいだけど、何やってるの？」

「新体操部！そうだ、三久のレオタード見ますう？」

「う、うん、ぜひ・・・」

三久ちゃんは立ち上がり、

クローゼットから白いレオタードを出した。

「んつと・・・おにいさまあ、ちょっと待ってね」

「三久ちゃん！？」

おもむろにＴシャツとパンティを脱ぎ全裸になると、

取り出したレオタードをそのまま装着した。

「どうかなあ、似合ってるう？」

「う、うん、すごく可愛いよ・・・」

胸にはちいさなふくらみとかわいい乳首が透けて見える、

下半身に目をやるとあそこのラインがくつきりと・・・

「おにいさまあー」

そのままの姿で近づいてくる久ちゃんに、

僕はごくりと唾を飲み込んだ。

「そ、その、三久ちゃん、お話を・・・」

「なあにおにいさま？」

レオタードだけを纏った三久ちゃんが、
僕のとなりに寄り添う。

「あの、その、えっと・・・」

「な・あ・に？」

三久ちゃんのその恥ずかしい格好に、

僕は何も話せなくなってしまった・・・

「や、やっぱり、僕、居間で寝るよっ！」

「あん！」

三久ちゃんから逃げようとベットの上を四つん這いになった直後、
僕の股間がぎゅっと掴まれた！

「ああっ!!」

「うふふ、おにいさまぁぁ」

「うああああっっ!!」

四つん這いの僕の背中に抱きつき、

右手で勃起したモノをパンツから出しにぎる三久ちゃん。

「すっごーい、やっぱり期待してたんだぁ」

「はぁぁ、や、やめて・・・」

ぎゅっ、ぎゅっ　僕のモノをにぎる三久ちゃん、

四つん這いの僕の両腕両足が震える、

横から見れば犬の交尾のような姿だろう、

もっともオスとメスの位置が逆だが・・・

なんてことを思い浮かべると、恥ずかしくなって顔が赤くなる。

「おにいさま、耳まで真っ赤にして興奮してるう」

「あ、あううう・・・」

自然と腰が三久ちゃんの方へと沈んでいく、

三久ちゃんは空いている方の手で僕の着ているシャツをたくしあげた、

僕の背中があらわになるとともにシャツが裏返しになり、

首のところで引っかかって僕の両腕を包む・・・

まるで小さな子供が自分一人でシャツを脱げなくて困っているような格好だ。

「やあっ！やめて、三久ちゃん、う、動けないよおお!!」

「おにいさまあー、うふふふう・・・」

ばさあぁっ・・・

「ひゃああああ!!!!」

露になった僕の背中に、

ぱさっ、とたまらなくすぐったい感覚が広がった!

これは三久ちゃんの髪の毛・・・僕の背中に三久ちゃんの髪の毛がかかっているう!!

「おにいさま、すごい敏感・・・」

「あひゃああ!や、やめてえええ!!!!」

三久ちゃんは手で僕のモノをきゅっきゅっと握りながら、

首を動かして僕の背中をその長い髪の毛でくすぐる!!

その背筋を襲う髪の毛のくすぐったさといったら、もう即ギブアップしたいほどだ!!

「やめてえつ、三久ちゃん！背中あ！おちんちんもおおつ！！」

「そんなにいいですかあ？おにいさまあ、おにいさまあ」

うう、なんてくすぐったすぎる髪の毛なんだあ！！
背中で巨大な髪が渦巻くようにくすぐっていて、

ちっちゃな両手は僕の股間の玉を揉みしだきながらモノをきゅつきゅつと！！

あああああ！まだこんなにすぐつたい方法が残っていたなんてええ！！

いかされちゃうう、また、くすぐられながらいかされちゃうううう
ううう!!!!!

「ひゃああ——！！！」

びゅくつ！びゅくんつ！びゅるびゅるびゅる……

「すっごーい、おにさまのこれ、ホースみたあーい」

「ああっ！！そんなにいい！しっ、搾らないでええええっ！あひや
ああああ！！！」

「きやははっ、おにいさま、かわいいーですうー」

はあっ、気持ちよすぎてとまらないいいー

ふあさふあさと背中に揺れながらかかる三久ちゃんの髪の毛、

まとわりつく何とも言えないくすぐったさとおー、

両手で股間をぎゅっぎゅっとなされてる快感があー、

重なってえー、気が狂うほどのすごさでえー、ひいー！！！！

びゅーっ！びゅっ！びちゃびちゃっ！！

「ひーっ！ひーっ！ひいーっ！」

「おにいさま、すごい悲鳴・・・三久、感じちゃいますう」

すごい勢いの射精がまだ止まらない・・・

乳搾りのように大量の白い液があああ・・・

ぜ、全部、僕の玉の中の液が、一滴残らず搾り出されちゃっつっつっつ
うう・・・

4日目「3」

「おにいさまのこれ、ころころしてるう」

「はあっ！それ以上、玉は・・・ひゃあああっっ！-」

「かーわいいっ」

「ああっ、も、もうっ、やめてえっ、耐え切れないっ・・・よおおおー！！」

「じゃあもっともっとするねえー」

じよ、冗談じゃないっ！！！！

四つん這いの両手両足はもう限界までガクガク震え、

背中にくすぐったさも発狂寸前、ペニスなんかは射精しすぎてもう痛い・・・

あまりの勢いの僕の胸や顎にまで自分の精液が飛び散っている、

むせるようなこの匂い・・・ああっ、もう手足が・・・限界だああああ！！！！

「ひいつ、も、もう、で、出ないっ・ひいいい．．．」

僕はベットにべちゃっ、と崩れ落ちた．．．

うつ伏せで壮絶な快感の余韻に苦しめられる僕．．．

するとやっとペニスと玉から手を放す三久ちゃん、髪の毛も離れる．
．．

「はぁ．．．はぁ．．．はぁ．．．」

「おにいさまぁ、こっち向いてくださあい．．．」

「も、もうだめ．．．も、もう．．．かんべんして．．．」

「仰向けにならないと、また背中くすぐっちゃいますよぉ」

「そ、それは．．．嫌ぁ．．．」

仰向けになろうと身を転がしてみるものの、

すでに痺れるようなくすぐったさと射精の疲労で思っように動けない、

しかし何とかやっこの思いで仰向けになる、すると僕の上には・・・！！

「これ、なーーんだ」

「それは・・・ひいつ！！！！」

薄いレオタード姿の三久ちゃんの手には、

ひいふうみい・・・合計8本もの様々な筆が・・・

夕方にデパートで買った、あのものすごくくすぐったそうな、筆が！！

「これはねえ、おにいさまを喜ばせる物です」

「もう、もうやめてええ、嫌ああー」

13歳の少女に向かって泣いて許しを請う僕、

しかしそれは逆に少女の中のサディスティックな「女」の部分に刺激し、

燃え上がらせてしまう極上のスパイスになってしまふのであった。

「これでしつかりとくすぐったさが気持ちいいって事をわかってもらいますう」

「死んじゃう！死んじゃう！死んじゃうよおおお！！！」

「大丈夫ですよ、くすぐったいのが気持ちいいっていうのをしつかり認めてくれればいいんですう」

「やだよ、くすぐったいのはあ、もう・・・やだよおお」

「本当はもうくすぐったいのが好きで好きでたまらないんですよ？じゃあいきまーす」

8本の筆のうち一番大きい筆を僕の胸へ下ろす・・・！！

「ひゃひゃあああああーーーー！！！！！」

「まずはこのハケになってる筆をお・・・」

すうーーーーっ・・・

「ひゃあああっ！くすぐったいい！ち、乳首があああ！！」

「おにいさま、こんなに敏感になっちゃってえ・・・」

「やめて！やめて！やめてえええ！！」

「もうひとつの乳首はこの細い筆でえ・・・」

「だめえ！ああっ、はあああああー！！！」

すっ、すーっ・・・

さわさわわっ・・・ささーっ・・・

「ああっうっうー！！」

「ちよっとくすぐっただけなのに、おにいさまの乳首こんなに・・・」

「ああ！あ！ああああ！！」

「とんがっちゃってえ・・・固いのかなあ？こちょこちょこちょ・・・」

「あひい！いつ！いやだ！いやだよおお！やあああああ・・・」

乳首のくすぐりが激しくなり、

さらには他の筆も使って乳首の回りから胸を全体的に・・・

一番太く大きい筆が乳首を弾くと「コリッ、コリッ」と芯が鳴る。

「やあ・・・やだあ・・・やああああ・・・」

「まだまだですよお、次はこの筆とこの筆でえ、ここを・・・」

「ひゃあっ・・・あ・・・ああああー」

今度は2本の筆を首筋に滑らせる、

なんとか逃げようともがく僕だが、

すでに両腕に絡まったシャツをほどく体力すら残っていない。

「あぐつ．．．あひやあ．．．あああ．．．」

「そんなに泣くほど気持ちいいんですかあー」

泣くほど……

涙が止まらないほど・・・

くすくす　たいよおおおー――！！！！

「ひやあ・・・ひやあ・・・あひや・・・」

筆は首筋から耳元、耳の後ろへ・・・

「耳の中もくすぐられると気持ちいいですよ」

「い
い
い
！
・
・
・
い
い
い
い
い
い
！
！」

「鼓膜までくすぐってあげますう」

一番細い筆2本を舌先でぺろつとなめると、

それを僕の両耳の中へゆっくり、ゆつくと刺し込む、

まるで僕の恐怖に歪む表情を楽しむかのように……！！

ざわっ……ざわざわざわっ……！！

「ひひひひひ！あひゃああああ……！！」

ステレオで攻める筆の音、

そしてその迫力で増す、くすぐったさ……！

無数の毛先が耳の敏感な内壁をくすぐりだすう……！！

がさごそっ、ごそごそごそっ……

「ひい！耳が！耳がああ……！！」

「あがががが．．．」

泡を吹く僕、

完全に脳のどこかをおかしくされたような感じがした、

くすぐり攻めを攻めに攻められた結果だ．．．

「もっと、もっともつとしてあげるっ」

「がぁ．．．あがぁ．．．が．．．．．」

耳への攻めは延々と続き、

やがてようやく筆は抜かれた、

僕の表情はさぞかし酷く歪んでいるだろう．．．

「おにいさま、休ませませんよぉ、

今度はこの一番大きい筆でえ・・・」

大きな筆2本を構えると、

大きく開いた僕の両脇めがけ下ろした・・・！

「わっわっわっ！！」

「ぎゃひゃああああ！！！」

まるでお茶をたてるように、

丁寧に丹念に素早く筆で脇の中を掻き回す！！

そのくすぐったさは僕をいたぶり悶え殺すには充分なほどだ！！

「ぎゃひゃひゃあっ！あひゃ！ひゃあっひゃひゃああ！！！」

「おにいさま、ね、すごいでしょうっ？」

「ひゃあ！こ、こころじでええ！も、もつ、こころし・・・てええ！！」

「耐え切れなくなっただんですかあ？まだまだ耐えられるはずですよ」

「もっつ！もつ、じ、じぬっつっ！...ぐぶっつっつっつっつっ！...」

脳が、

体が、

悲鳴を上げている！

もっ完全にSOSを出している！

なのに・・・なのに、やめてくれないいい！！！！

「まだはじまつたばかりですよ、

頭の中から足の先まで、もっとくすぐっちゃうんだからあ！

もっと、もっともっともっと・・・うふふふふふふふ・・・」

4日目〔4〕

．．．．．三久ちゃんは本当に、

頭の先から足の先まで8本の筆と、

10本の指でくすぐりつくしていった、

指先の爪の間までも丹念に丹念に．．．．

僕は意識朦朧、完全にくすぐられすぎによる麻痺状態だ。

「あ．．．ああ．．．あつ．．．つ．．．ああつ．．．」

「おにいさま、どう？気持ち良かったでしょう？？」

「．．．うあ．．．う．．．．．ううう．．．．」

「だってここ、こんなに．．．」

「う．．．ううう．．．うううう！！」

僕のビンビンになったペニスを掴む三久ちゃん、

全身のくすぐりで何度も何度も射精したにもかかわらず、

くすぐったさですぐにペニスは強度を取り戻していったのだった。

「くすぐったいのが気持ちいいって、わかってくれました？」

「・・・あ・・・あぁっ・・・あう・・・」

「はつきり言ってくださいあい、くすぐったいのが気持ちいいってえ」

三久ちゃんは僕の腰に馬乗りになり、

股で僕のペニスを挟んで腰を前後させた。

「う・・・うう！？」

びっくりしたが、大丈夫だ、

三久ちゃんの幼いあそこには入っていないようだ、

レオタードごしに俗に言う「素股」という状態・・・

しかし僕のペニスはすごく気持ちいい・・・!!

「・・・み・・・く・・・ちゃ・・・ん・・・ん・・・」

股間を見ようにも、

もう首を曲げて頭を起こす体力すら残っていない・・・

三久ちゃんは前がかみになった、すると・・・!!

ばさぁあっ・・・!!

「ぐうっ!-!-!」

僕の首筋に三久ちゃんの長い髪がかかる!

それが波打って僕の首筋をたまらなくくすぐる!!

いい!-いいっ!で、でる!また・・・またでちゃうっうっうっ!-!-!..

「だーめ」

ピタッ、と三久ちゃんの腰が止まり、

射精寸前でおあずけをくらう・・・

ゆらめく髪は僕の首にたれて、やがて止まった・・・

「あ・・・う?」

「おにいさま、ちゃんと言ってください、

『くすぐられて気持ちいい』って、はっきりと

「・・・う・・・う・・・」

「でないと、『くすぐられるのが、くすぐったいのが気持ちいい』
って、

言わないとイかせてあげませんからあ」

そついうと三久ちゃんは首を揺らし、

また長い髪で僕の首筋や胸板をくすぐりはじめる、

両手では指でじかに僕の両脇をくすぐりだした。

「あうー・・・うー・・・ううー！！！！」

「おにいさま、言ってください！くすぐったくって気持ちいいって
！」

「うー！！ううー！！ううー！！！！！！！！！！」

今度はさらにすさまじくくすぐったいの、

ピタッと止まった三久ちゃんの腰がイかせてくれない！

僕は自らの腰を動かそうとするがそんな力など残っていないかった・・・
「！！！！」

「おにいさま、はやくうー！！」

「が・・・あ・・・ああ・・・」

「喉が枯れちゃったんですかあ？じゃあ・・・」

さらに頭をかがめ、

唇を重ねてくる三久ちゃん、

瞬間、ドロリと大量の唾液が流れ込んでくるう・・・

ぐくん、ぐくんっ・・・

「・・・これと言えますよね？」

「っ・・・あひゃひゃああっ!!!!」

くすぐりはますますエスカレートしていく!!

「あひゃっ! ああっ!!」

「ほーらおにいさま、もう我慢できないでしょっつ、」

「ああっ! ああああー!!!!」

「はやく言って・・・ねえ・・・」

「はっ・・・う・・・うっうっうっうっ！..」

暗示にかけるようにやさしく問い掛ける三久ちゃん・・・

そうだ、これはおそらく暗示だろう、そう言わせながら射精させることで、

心身ともに完全にくすぐられないと射精できなくさせる、まさにトドメとなる・・・

そうなってしまうと僕の心と体は、

くすぐったさイコール快感であると完全に認識してしまい、

この先、もう三久ちゃん無しでは一生、生きていけない焼き印を押されてしまう、

そうでなくてもくすぐられないと感じない体になるということは、

三久ちゃん以外ではまともな結婚もできなくなるだろう、間違いない。

そんな「変態」「くすぐり奴隷」になっても本当にいいのか!?

しかし、もう遅かった、

僕に選択の余地はすでないようだ、

射精したくてもできない状況に心身ともにもう悲鳴をあげている、

たまらないほど甘く激しく永い永いくすぐりに、

もう完全にとらわれてしまっていて、射精させてもらっしかもう道はない!!

「おにいさま、ほらぁ・・・」

「・・・い、い・・・いいい・・・」

「なあに?」

「いい・・・いいよぉ・・・」

「何がいいのお?」

「き・・・きい・・・きい・・・」

はつきり言ってしまうばすぐに楽になるのだが、

快感と最後に残った理性が躊躇して呂律が回らない・・・！！

「き・・・もっ・・・ち・・・いい・・・」

「何が気持ちいいの？」

「あそこ・・・あそこがあ・・・」

「なんで？なんで気持ちいいんですかあ？」

「かはあああっ！ああっ！く、くうっ・・・」

甘い声で幼い子供をさとすように、

幼い子供である三久ちゃんに言われる、

やっぱり駄目だ！言っちゃ駄目だ！言っちゃうと・・・

言っちゃうと、言っちゃうと、僕は、間違いなく・・・

この先一生、くすぐり中毒に！！！！！！

「おにいさまぁ、どうして気持ちいいんですかあ？」

「くす．．．すっ．．．くて．．．え．．．」

「くすぐったくて？」

「くうっ．．．くうっ．．．あくてええ．．．」

「くすぐったくて、どうなんですか？」

「き．．．きい．．．いいい．．．」

「気持ちいいんですか？気持ちいいんですね？」

僕にはつきり言わせようと、

言葉をなぞって認識させる三久ちゃん、

抵抗力が皆無に等しい僕はこの誘導の罠にはまるしかなかった．．．

「はつきりと．．．くすぐったくて？」

「く．．．くすぐっ．．．たっ．．．くて．．．」

「気持ちいい？」

「・・・いい・・・いいっ・・・」

「もっとはつきりい」

軽く腰をひねる三久ちゃん、

甘い声とこの腰の誘惑に、

僕は・・・僕は・・・僕は・・・！！

「くっ、く、くすぐったくてええ!!」

駄目だ！

それを言ったら・・・

言ったらああああ——！！！！！！！！

「くすぐったくて、きもち、iiiiiiiiiiiiiiii——！！」

「もつとはつきりい!」

「いいの!くすぐったいのが、気持ちいいのおおおー!」

その瞬間、

三久ちゃんの腰が小刻みにヴァイブレーションをはじめた!!

「いいっ!気持ち、いいいいいー!」

「ふふふう、おにいさま、ついに、言っちゃいましたねえ!」

「くすぐたい!くすぐたいのが、きもちいいよおー!」

びゅるびゅるびゅるびゅるつつつー!……!……!

僕の中で大きな、大切なものがはじけた……

心と体とくすぐったさが1つになって、

今までの中で1番の、本当の快感が大波になって押し寄せた！

尿道が切れんばかりの射精・・・無理もない、

ついに、ついに、くすぐったさがそのまま快感となった瞬間なのだから！！

「あうー！いいよおおー！くすぐったいのがあ！

きもち・・・きもちいいよ！くすぐったいのがきもちいいー！！」

「ああん！三久も！三久もいいのおおおー！！」

三久ちゃんも幼いあそこを僕のペニスになすりつけ、

絶頂を迎えているようだ・・・ああ・・・

ついに・・・ついにこうして僕は・・・とうとう・・・

くすぐったさが快感である事を焼き付けられたのだった！！

「いい——、いい——!!」

びゅくん、びゅくん、びゅくん……

くすぐられ続けたまま、

射精し続けたまま、

僕は静かに気を失っていった……

5日目 ①

5日目の朝、

全身を襲つくすぐつたさで目が覚めた。

「あひゃ、ひゃあっ!!」

見るとパジャマ姿の三久ちゃんが僕をくすぐっている!

「み、三久ちゃん!」

「おはようございます」

「あひゃひゃあっ!!」

しかも太股を僕の股間に擦り付けながら・・・

で、で、でるっつっ!!!!

ぴゅうつっ!!

「ふふ、おにいさま、すぐイっちゃったあ」

「三久ちゃん・・・そんな、急に・・・」

「これでもう、おにいさまは、三久のものだよね」

そうだ・・・

ゆうべのアレで・・・

僕はもう、完全に三久ちゃんに支配されたのだった・・・

「一緒に朝のお風呂入りましょう」

「う、う、うん・・・」

「おにいさまのパンツもよごれちゃったしい・・・」

三久ちゃんに汚されたようなものなんだけど・・・

．．．．汚された．．．．僕の体を．．

．．三久ちゃんに．．僕は三久ちゃんに．．身も心も犯された．．

ガラガラガラ

「さっき沸いたばかりなんですう、ちょっと熱いかもお」

裸ではしゃぐ三久ちゃん、

僕はもう諦めの境地である。

「三久ちゃん．．」

「きゃんっ」

後ろから裸で三久ちゃんにきゅっと抱き付く僕・・・

可愛い・・・三久ちゃん、可愛らしすぎて、愛おしく感じる・・・

三久ちゃん自身も僕にきゅっと抱かれているのを感じているようだ・
・

「おにいさまぁ・・・」

僕の抱く腕を三久ちゃんは小さな腕でぎゅっと胸に抱く・・・

ああ、これが「愛し合ってる」って事なのかもしれない・・・

それだけ三久ちゃんに、心を奪われてしまった・・・あのくすぐり
調教で・・・

「三久ちゃん、隅々まで洗ってあげるからね」

「嬉しいですよ、おにいさまも三久が洗いますからあ」

「ははは・・・恐いな」

僕は三久ちゃんの体を丹念に洗う、

今度は恥ずかしい場所も凝視して・・・

こんなに幼く可愛い少女が、僕のものになるんだ・・・

いや、こんなに幼く可愛い少女のものになってしまったんだ、僕が。
力を入れすぎないように、やさしく、丁寧に、愛撫するように洗ってあげる・・・

三久ちゃんは目をとろんとして、とても気持ちよさそうだ、妖艶な表情の少女・・・

それがそらずにはいられない、僕はビンビンに勃起してしまっている・・・三久ちゃん・・・

「おにいさまあ」

「なにかな？」

「三久のこと、好き？」

その問いかけに躊躇する僕、

本当に・・・本当にこのまま墜ちてしまってもいいのだろうか・・・

僕は三久ちゃんが、本当に好きなのだろうか・・・無言になってしまっ僕・・・

「三久ちゃん・・・」

「ねえ、おにいさまあ、結婚してくれるっ？」

「・・・三久ちゃんまだ13歳じゃないか、結婚できないよ」

「でもちゃんと婚約すれば結婚と同じですう、形式は関係ないですよあ、ねえ・・・」

振り向いて僕の胸に甘える三久ちゃん・・・

ああ、甘い・・・三久ちゃんの何もかもが甘ったるい・・・

このままとろけて、身も心も三久ちゃんに捧げれば、僕は一生、

三久ちゃんの甘美なくすぐりに揉みしだかれる・・・至上の快楽で・・・

自由なんかより三久ちゃんに死ぬまでくすぐりで束縛された方が・・・
・気持ちいいかも・・・

「おにいさまあ、いちよいちよいちよ……」

「きや ひや ひや あー ひや ひや あー ひや ああ ああ あー……！！」

すさまじく、ひどく敏感に身悶える僕、

まるで深く考えさせないためのように激しくくすぐる三久ちゃん、ちっちゃな指で脇の下をくすぐられただけで炎に包まれたかのよう
に悶えてしまう！

火で焦がされているがごとく皮膚が敏感にくすぐったさに反応し頭が白くなる、

全身の力は筋肉を切断されたかのように抜け、あっという間にくすぐったさに支配される！

「いちよいちよ、いしよいしよいしよ……」

「ひいー！ひいっ！ひいー！ひいっ！ひいー！ひいっ！ひいー！ひいっ！ひいー！ひいっ！ひいー！ひいっ！」

よだれがあふれる・・・

この「快感」に激しく勃起する・・・

三久ちゃんが全身でまた僕のペニスをこする、くすぐりながらあー!!

きゅっ、きゅっ、きゅっ・・・

にゅるっ、にゅるっ、にゅるうっ・・・

「あひい！ひい！ひいっ！！」

やわらかくもあり、かたくもあるその裸体で、

僕のペニスをもくすぐっているかのようにだ・・・

そのまま僕はいとも簡単にのぼりつめ、三久ちゃんの体に・・・

「いひゅっっっっー!!！」

「ああんっっー!!！」

びゅるびゅるびゅるうつうつ!!

強制射精させられてしまったぁ・・・

びゅっ、びゅっ、びゅうつ・・・

たつぷり搾り出されると三久ちゃんのくすぐりがようやく離れた、

お風呂場の床のタイルに背をつけて仰向けに動けない僕・・・

三久ちゃんはお風呂の水を桶ですくって水でぬるくし僕にかける、
三久ちゃん自身にも。

そしてボディソープを取り出すと互いに汚れた体へ滴らし、スポン
ジを持って、

まずは三久ちゃん自身の体を洗った、あわまみれの三久ちゃんは、
そのまま僕に抱き着いた！

「さぁおにいさま、三久が隅々まで洗ってあげますっ」

「ひっ・・・また、くすぐったいい！」

「そうですね、くすぐったいのが、気持ちいいですよ」

そして恐怖の全身ソープで、

バテバテの僕の敏感な体をきゅっ、きゅっと、

くすぐり洗いはじめたのだった、生きたくすぐりマシンとして！
！

襲えば、

幼くもピンと勃起した乳首がそこからすぐったさの電流を流しているかのように僕の胸をいぢめ、

甘く攻め続ける声は僕の脳を中からくすぐり犯しているようなものだ、僕はもう、めちゃくちゃだ！！

ぴゅ、ぴゅ、ぴゅーーーーー……

連続射精とすっかりくすぐったさの快感を開発してしまった疲労で、

ぐったりしている僕をさらに貪欲に犯す三久ちゃん、こんなすさまじいくすぐり、

まだ三久ちゃんのおそこに1度も入れてないにもかかわらずそれをはるかに凌ぐような犯しかただ、

逆を言えばまだ最後の最後の砦が残っているということが、最後の牙城、

三久ちゃんのおそこに挿入していないという事実……と考えていると三久ちゃんがまた離れる。

「髪の毛も洗ってあげますう」

僕のからだをうんしょ、と起こし、

シャンプーで丹念に頭を洗ってくれる・・・

僕はなすがままなんだけど、こ、これさえもくすぐりたい!!

全身どこもかしくも敏感になりすぎてしまっている、ああ、ああ・

出し尽くして真っ赤なペニスもまた勃起してしまっているう、もう、
助けて・・・

「こっちも洗うう」

「はあっ!! あひゃひゃひゃあ!!!!」

僕の脇毛を丹念に泡立てて洗う、

抵抗できない僕はそのままくすぐったさに狂わされる!

そして今度は僕の陰毛に手が伸びしゃかししゃかと洗いだした!!

「ひゃっ！ひゃっ！そこはああ！！」

しゃかしゃかしゃか・・・

丹念に陰毛をその幼い両手でしつこく洗われると、

新たなくすぐった気持ちいい感覚がからみついて恍惚とさせる！

「気持ちいい？」

「う・・・うんっ・・・きもひ・・・いいよ・・・」

「三久と結婚してくれる？」

「う・・・うう・・・」

「ねえ・・・してくれるう？?？」

「あ・・・ああ・・・ああっ・・・」

「結婚してくれるって言わないと、言うまでくすぐっちゃうですよ
お」

「う……う……う……う……う……」

三久ちゃんはザバツ、とお風呂に入った。

「いいもん、今日は一日中お休みだから、たっぷりくすぐっちゃうんだから」

「あう……う……うあ……」

「そして三久と結婚するって誓わせるんだからあ」

ようやく動けるようになった僕はお風呂を出て朝食を食べる、

このあと三久ちゃんに無茶苦茶にされるのはわかりきっている、

それを絶対に逆らえないということも、体が望んでいるということも……

せめて僕にできるのは、くすぐりに虫食まれたこの体を少しでも回復させることだと、

めいっぱい朝ご飯を食べた、すでに体力を奪われきつているので腹が減ってるという事もあるが、

体力をつけないと体が持たないからだ、しかし体力をつけなければつけるほど、より多くの時間、

くすぐりに狂わされるのだ・・・ああ、もう観念するしかないのか・・・！？

「おにいさま、三杯も食べちゃったあ」

僕の膝の上で微笑む三久ちゃん・・・

僕の人生を、性感を狂わせた悪魔・・・

天使のような笑顔で僕を、僕をめちゃくちゃに調教した少女・・・
！！

「ごちそうさま・・・」

「ごちそうさまあ、さ、おにいさま、三久の部屋へ行きましょう」

逆らえない・・・

三久ちゃんに逆らえない・・・

ああ、これからくすぐられるのを期待している、

1日中くすぐられるということに、胸が高まっている・・・

正直、勃起がもうおさまらない・・・狂う・・・狂いたい・・・狂わせて・・・!!

「今日はこれを使いますう」

取り出したのは4つの手錠、

くすぐられながら全裸にされた僕は、

なすがままに両手両足を手錠でベットにはめられ、

大の字で動けなくされてしまった、思えば三久ちゃん色んな道具を使ったなあ、

耳かき、リボン、絵筆、髪の毛・・・手錠だってリボンの時とはま

た違い、

幼い三久ちゃんにガチャツ、ガチャツと1つ1つはめられるたびに
激しく感じてしまった、

この精神的な犯し方といい、手錠を持っている事といい、本当に1
3歳なのだろうか、

それとも代々、金持ちの家の子を快楽で囚えてきた血脈のなせる技
なのか・・・その毒牙に僕も・・・

「おにいさま、ここ、疲れたでしょう?」

「ひっ!」

射精のしすぎでヒリヒリしながらも、

手錠をかけられた感触で激しく勃起しているペニスをなでる三久ち
ゃん、

ああ、もっと、もっといぢめて、くすぐってほしい・・・ああ、あ
あ、ああっ・・・

「夜までに絶対、おにいさまの口から『結婚してください』って言

わせるんだからあ」

「あうっ・・・あうあうっ・・・」

「しかも、泣き叫びながら・・・おにいさまあ、覚悟してください
あい・・・」

トローンと色つばい目つきに僕もトローンとなる、

三久ちゃんのなすがまま・・・ああ、もっと、めちゃくちやにされ
たい、

一生、三久ちゃんに、こちよこちよ犯されて、狂ってしまいたい・
・三久ちゃんっ・・・

173

「おにいさまにはまず、おにいさまが三久のものだって印をつけま
すねえ」

「し、しるしって・・・!?!」

「これですう」

僕の胸に顔をうずめ・・・

ちよっ、ちゅっ、ちゅっ・・・

「はあっ!!」

丹念にキスをする三久ちゃん・・・

まずは軽いキスを胸全体にあびせる・・・

ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ・・・

「はわわ・・・く、くしゅぐったあい・・・」

それがやがて速くなり、

キスも「つけるキス」から「吸うキス」へと変化していく!

ちゅうつ、ちゅうつ、ちゅうつうつっ！！

「あひい！三久ちゃあん！あああんっっ！！」

思わず少女のような声が出てしまう僕、

胸のキスが激しくなるにつれくすぐったい快感も増していき、

ふと見ると胸にはくつきりとキスマークがいくつもついてゾッとする！

「みつ、三久ちゃああん！！！」

「おにいさまあ、これ、あとがついて残っちゃいますよお」

「そんなっ・・・」

ちゅうつうつ、ちゅうつうつ、ちゅうつうつっ！！

「ああっ！乳首っ、吸わないでえ！！！」

「おにいさまの全身、三久のキスマークだらけにしちゃいますう」

ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ

ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ

ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅ
っ　ちゅっ　ちゅっ

ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅ
っ　ちゅっ　ちゅっ

ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　ちゅ
っ　ちゅっ　ちゅっ　・・・

「あひゃ！あひゃ！あひゃひゃひゃひゃ・・・！！」

キスは胸から首筋、耳や顔全体から腹、腰、両手両足にいたるまで、
仰向けでつけられる部分は全てくまなく、くつきりとキスマークを
つけられ、

そのくすぐったさに僕は１回１回のキスで悲鳴をあげさせられる・

・・・

「おにいさまあ、夢心地でしょう?」

「あひい、ひい、ひい・・・」

「こんなにつけられちゃったら、明後日の月曜まで表には出られないですねえ」

「うう・う・う・う・う・う・・・」

「これでおにいさまが土日と外ですごすっていう逃げ道はなくなっちゃいましたよお」

確かに・・・というか、そういう手もあったんだ・・・

でも、考え付く前に先手を打たれてしまった・・・横の鏡を見る・・・

恥ずかしい・・・三久ちゃんのキスマークが顔にもびっちり・・・

これは月曜までに取れるのか?へたすると1週間はそのまま・・・

恐い・・・でもこの恐怖感のゾクゾクさえも、くすぐった心地よい・・・

「おにいさまあ、キスの嵐、どうでしたあ？」

「こ、こわい・・・こわいよあ・・・」

「すっごく感じましたあ？でもまだイッてないんですよえ？」

「う・・・うっ・・・い、いかせて・・・」

「おにいさまあ、まだキスしてない所ありますう、こことか・・・」

そう言いながら顔を近づけ、唇を重ねる三久ちゃん・・・

舌が僕の口の中までキスマークだらけにするがごとく舐め回してくる・・・

口の中までくすぐったく、また両手で僕の喉を愛撫し、そそがれた唾液を飲まされる・・・

しっごく長いキス、そのまま三久ちゃんはなかなか唇を離そうとはせず、

約30分以上もの深い深いディープキスで僕を徹底的に甘くとりけさせた・・・

「おにいさまぁ・・・」

きゅっと全身に抱き着かれる・・・

互いの同じボディソープの匂いが香る・・・

ああ、僕の体からも三久ちゃんのあの甘い香りがしてる・・・

そう思うとますます僕が三久ちゃんのものになってしまったように感じ、

興奮し勃起がズキンと痛くなる・・・はやく、はやく目茶苦茶にして出させて・・・！！

「ねえ、おにいさま、どうしてほしいのぉ？」

「うっ・・・三久ちゃん、その、く、くすぐって・・・」

「くすぐってほしいのぉ？くすぐられると、どなるのぉ？」

「僕は、くすぐられると、すっごく、き、気持ちいい・・・」

「そうですね、おにいさまはくすぐられないとイけないんですよねえ？」

「うん、僕はくすぐられないと、イけない・・・」

すっかり甘い雰囲気に入る僕・・・

「三久のくすぐりじゃないと駄目なんですよねえ？」

「そう、三久ちゃんに、く、くすぐられないとお・・・」

「おにいさまあ、それって、へんたいですよあ」

「うつつ、そ、そう、僕は、もう変態なんだ、だから・・・」

「だから？」

「はやく、はやく、めちゃくちやにしてえ・・・」

「そんなにくすぐりがいいのお？」

「いいよお・・・めちゃくちや、いい・・・」

「そうですよねえ、三久が徹底的に刷り込んだんですものお」

「そう、三久ちゃん、だから・・・はあう!!」

僕の全身をやさしく愛撫する三久ちゃん、

それだけでくすぐった心地よすぎるとっつ．．．

「おにいさまあ、泣いてるう」

「は、はやく、はやくうう！..」

「三久のこと、愛してる？」

「あっ、あいしてるうう．．．」

「三久のこと、何でもいうおときいてくれる？」

「きくっ、きくう．．．」

耳に口を近づけ、

吐息交じりでささやき続ける．．．

「これから毎日、三久にくすぐられてくれる？」

「うんっ、毎日、三久ちゃんにくすぐられたいい．．．」

「でも毎日おにいさまをくすぐるには、毎日おにいさまがここにい

てくれないとできないですう」

「うん、いる、毎日、ここに……」

「じゃあ、ずっとここに、この家に住んでくれるう？」

「す、す、住むう、三久ちゃんと、住むう……」

「絶対に出て行かない？ 出て行かないなら毎晩、くすぐって眠らせてあげますよお」

「ぜった……い、で、でていか……ない……」

愛撫の手が股間に集中する……

「三久とこれから先、ずうーっと一緒に暮らしてくれるのねえ？」

「うんっ、ずっと……一緒に……くらすう……」

「つまり……結婚してくれるのね？」

きゅっっ、と僕のペニスをつかむ……

「はっあうあう・・・」

片方の手の指で茎をにぎにぎし、

もう片方の指5本を使って亀頭をこちょこちょとくすぐる、

敏感なくすぐったさが僕を天国へと導く・・・もう、どうにでもして、もっと、もっと・・・

「おにいさまぁ、つまり、結婚、してくれるのよね？」

「はわわ・・・」

「結婚してくれたら、もっとすごいことしてあげますう」

「も、もっと・・・!？」

「そうですね、たとえば、こんな風に・・・」

そのまま舌を僕の耳の穴へ入れる三久ちゃん!!

5日目「3」

「あああああああ！！！！」

このゾクゾク感とくすぐったさがたまらない、

まるでエイリアンが脳に進入しているかのような感触、

脳の快楽神経を直接刺激するような舌技、唾液の生暖かさ・・・

さらに指のくすぐりもペニスをもてあそぶかのようににはげしくこちよこちよと！

ビクン、ビクンと動くペニス、射精をしようとした瞬間、三久ちゃんの手がペニスから離れた！

「ね？まだまだもつとすごいことしてあげますからあ・・・結婚してえ・・・」

「・・・す、するう・・・三久ちゃんと・・・結婚・・・するう・・・」

「本当に？三久と結婚するのね？おにいさまを、三久にくれるのね？」

「ほーらおにいさま、気絶するまでいかせますからあ」

「あひゃひゃひゃひゃああー！あああひゃあああー！！」

「結婚してくれるんですよね？三久と、してくれるんですよね？」

「するう！するう！けっこんするうううひゃああああああ
――！」

「とうとう泣きながら言っちゃったあ、おにいさまあ、さいこおー
！」

股間を襲っていたくすぐりの手が全身に広がる！！

「ひゃはあっ！はひゃあ！あひゃひゃあああううううー！
――！」

「おにいさまはこれから、どんどんくすぐりに弱くなっちゃうんで
すからあ」

「いぐうー！いぐうー！いっでるううううー！――！――！」

「でも、いきすぎて気絶しすぎて、イクのも気絶もしくくなっていくんですよ」

[illegible]

そんな・・・快感が増えていくのに、くすぐりの抵抗力も弱くなつていくのに、

射精しにくい、つまり快感の上限があがっていき、気絶により逃げることもできなくなっていくなんてえ……

地獄．．．くすぐり地獄．．．くすぐり快樂地獄だ．．．まさに恐
怖．．．恐怖だ．．．

「いちよーいちよーいちよーいちよーいちよーいちよー」

「あひやつ、ひやつ・・・ひゃあああ・・・」

声が枯れてきた……でもまったくやめない……

僕が気絶するまで激しく続くだろう……こんなに可愛いのに……

お姫様みたいに可愛い三久ちゃんが・・・涎を垂らして興奮して攻めている・・・

無邪気に僕を犯して壊すお姫様・・・恐怖のくすぐり姫といったところだ・・・

ああ、恐怖のくすぐり姫の手に落ちた王子は・・・一生、くすぐり奴隷にされてしまう・・・!!

「おにいさまあ、たまらないでしょあ？」

「あひい、あひい、あひい・・・」

麻薬のようなくすぐりに僕はまさにいきっぱなしだ、

もっと、もっと、もっとお・・・もう、どうなってもいい・・・

ねちねちとくすぐられ続けた僕は、

おもらしもうまく尿瓶に入れられ、

そのまま何時間も延々と狂わされ続けた・・・

「・・・はひい・・・ひい・・・い・・・」

「おにいさま、やっと気絶しそう・・・」

「・・・・・・・・うあ・・・・・・・・あ・・・・・・・・あひい・・・・・・・・」

「じゃあ、休ませてあげるう」

「ひ・・・・・・・・ひい・・・・・・・・いい・・・・・・・・」

バツと離れる三久ちゃん、

汗でびっしょりだ、二人とも・・・

大きく息をきらす僕・・・手錠がガチャ、ガチャと外される・・・

「手錠のあとがくつきりい・・・おにいさま、これ、とつぶん消えないよあ」

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・あっ・・・・・・・・っ・・・・・・・・」

まったく動けない僕・・・ペットの水を飲ませてくれる・・・

一息ついたあと、今度はよいしょ、と僕のからだを裏返し、

うつぶせにしてしまった、ま、まさか!?

「じゃあ次は背中ねえ、ちゅっ、ちゅっ・・・」

「あひゃひゃああ!ああああ・・・」

背中にくまなくキスマークをつける、

かなり激しく、強く・・・とうぶん消えないくらいに・・・

敏感な背筋もこちょこちよする!ペニスが勃起させられる!ひいひい・・・

「休憩したから、また気絶しにくくなっちゃったかもお」

「あああ・・・ああああ・・・」

「これが毎日、普通になるんですよお、幸せですよねえ?」

「・・・あ・・・あ・・・あ・・・」

「三久はとーっても幸せですう、嬉しいい・・・」

こうしてさらに何時間もくすぐられ続け、ようやく気絶のときを迎えた・・・

「・・・あう・・・あ・・・」

「おにいさま、目がすごおい・・・気絶しちゃうんですね・・・」

「う・・・うう・・・」

「明日は三久のあそこに入れちゃいますからあ・・・」

「・・・・・・う・・・」

「そうなると三久もエスカレーターしちゃって・・・もうおにいさまはあ・・・」

「・・・・・・」

そのまま闇に吸い込まれた・・・

目を覚ますと夜だ、

時計を見ると4時・・・

僕の胸の上では三久ちゃんがスーッ寝ている、

う・・・手をにぎにぎしている、寝ててもくすぐっている格好を・・・

僕はそーっと三久ちゃんを胸から外し、ベットから立ち上がる。

「・・・ああ、まだ余韻が・・・」

フラフラ、クラクラしながらも服を着る僕、

まだ全身には鳥肌がたっている、と体を見ると、

びつちりとキスマークが・・・へたりこんでしまいそうなくらい恐
い・・・

「・・・でも、おなかすいた・・・」

そう、昨日は朝ご飯しか食べてなかった・・・

キッチンへ行って何か食べよう、と階段をゆっくり降りる、

廊下を歩くと・・・あれ？居間の方に明かりがついているぞ？

声も聞こえる、テレビがつけっぱなしか？いや違う、この声は・・・

一美さんと二恵さんだ、何か話あっているようだ、こんな時間にな
ぜだろう！？

「もう有人さんは三久の手に墜ちたようだわ」

「ああ、だからもういいだろ？私が出てっても」

「これから幸せになるんじゃないの、どうして出て行く必要があるの？」

「本当に幸せか？三久が、本当に有人の事、愛してると思うか？」

「そ、それは・・・」

え？本当は・・・愛してない！？

「三久だつて所詮、生きていくために仕込まれたテクニックを使ってるだけだよ」

「でも、三久、有人さんが来て本当に嬉しそうに・・・」

「単純だなあ姉さんは、そんなの芝居に決まってるよ、いつものことだよ」

「そうとは限らないじゃないの！それに家族になるのよ有人さんは！」

「で、金だけ貰ってポイ、で、いいんじゃないの？」

ひ、ひどい・・・

「何てこと言うのよ!」

「この家はそうやって大きくなってきたんだ、私はそれがもう嫌なんだよ」

「二恵・・・」

「私は三久が本当に有人の事を好きだなんて思えないね、快樂で虜にして吸い尽くして終わりさ」

「・・・だからって、二恵が出て行く事は・・・」

立ち上がる二恵さん。

「これで本当に終わりだなんて思えないんだよ!もう嫌なんだ!好きでもない醜い男に抱かれるのは!」

「・・・三久を信じましょう」

「その三久が可哀相で見られないんだ!まだ13歳だよ三久は!なのになのに・・・」

「お、おちついて・・・二恵・・・」

「私、三久も連れて出て行きたいぐらいだよ．．でも三久が選ばれちゃったから．．．」

そうか．．．冷静に考えると、そうだよな．．．

「じゃあ二恵、あなたが選ばれてたらどうするつもりだったの？」

「そ、それは．．．」

「二恵も最初は照れてたわよね？」

「え、選ばれなかったじゃないか！だから、もう関係ないよ！出てくから！」

「と、とにかく朝、お父様とお母様の所へ行きましょう、一緒に」

やばい、出てくる！隠れなきゃ．．．

まだ軽く言い合いながら廊下に出て去っていく一美さんと二恵さん．．．

．．．．．行ったようだ、ふう．．．ショックな事を聞いてしまった．．．．．

そうか、三久ちゃんはやっぱり俺を、金を運ぶ道具みたいなもの
しか見てないのか、

くすぐりで虜にして金を運ばせる・・・そこに愛はないのか・・・快
感はあるても・・・

そう思うと僕はなんだか悔しく恥ずかしく情けない気持ちになった、
やがてそれは怒りにも似た感情に・・・三久ちゃんに騙されていた
なんて・・・

もちろん三久ちゃんだって可哀相なんだけど・・・まんまとはめら
れたというか、

なんだかいろんな感情が脳の中でうねうねしてて、整理が付かない
や・・・うーん・・・

とりあえずお茶漬けかなんか作って空腹を癒そう・・・あ、僕のこ
飯がちゃんと用意されてて残ってる・・・

「いただきます・・・」

静かな食卓での1人の遅すぎる夕ご飯・・・

うう、体がムズムズする・・・くすぐりの余韻・・・

三久ちゃんの「結婚してくださあい」という甘い声が脳裏にまだ響いている・・・

まるで呪いみたいだ・・・でも、あの言葉は、本心じゃないかもしれない・・・

そうだ、なぜ三久ちゃんは僕を好きなのか・・・まだ13歳だ、本気で好きなんてありえないのかも・・・

僕はどうなんだ・・・くすぐりは別にして・・・

そもそも自由になりたかったんじゃないのか僕は？

・・・そうだ、何を悩む事があるんだ、僕は、僕は自由になるためにここへ来たんじゃないか！

二恵さんの言葉で目が覚めたかもしれない、三久ちゃんは僕を囚えるためだけにあんな事をしたんだ、

この家の援助金として僕を逃がさないために・・・そこに愛などない・・・

これは二恵さんも言っていた通り、三久ちゃんも可哀相だ、

あの幼さで美麗家の一族のとるべき行動を身に付けさせられて、

男を次々と食わされる・・・その将来は・・・だ、駄目だそんなの！

あんなに可愛い三久ちゃんをそんな将来にしてしまったら・・・だめだ・・・

じゃあ僕はどうすればいいんだろうか・・・この家から僕が去ったら・・・

そうなるとこの家はもつと大変になって三久ちゃんはもつと酷い目に・・・！？

そんな目にはさせられない、じゃあ僕がこの家に残って三久ちゃんを守る・・・！？

僕がこの家の跡取りとして頑張つて、三久ちゃんを幸せに・・・つておい、

それじゃあ僕はまるつきりこの家の思うが儘じゃないか、元をたどればじいちゃんの思うつぼ！

しまった！あぶないあぶない、すっかり身も心も三久ちゃんに奪われていた僕がいた・・・！！

「よし、この家を出よう！！」

ごくっ、ごくっ、ごくっ、と水を飲む僕・・・

人に同情して自分の人生を踏み外す訳にはいけない、

このままくすぐり中毒でぼろぼろにされて、用がなくなれば、

捨てられてしまうのは嫌だ！僕の体は確かにもう取り返しがつかなくなってるかもしれない、

いや、きつとまだ大丈夫だ、ぎりぎり・・・ぎりぎり大丈夫に違いない！きつとそうだ、大丈夫だ！！

自分にそう言い聞かせる・・・

まだぎりぎり大丈夫、このあと一生くすぐられなければ、

きつと、この極端にくすぐりに弱くなった体も耐え切れるはずだ、

とうぶんは後遺症みたいなものに悩まされるかもしれないが・・・

でも自分の意志をちゃんと持って、メントレをすれば必ず、元のからだに戻るはずだ！！

「あら、遅い夕食なんですわね」

「か、一美さん・・・!」

「もう5時すぎですわよ」

「そ、そうですか・・・あ、朝食の準備ですか!」

「ええ、そうですが・・・ちょっと所用で今日、出かける事になりまして、早めに」

うーんどしよう、このまま部屋に戻れば、

朝、目覚めた三久ちゃんの指のえじきに・・・!!

「じゃあ今日は僕も手伝いますよ」

「そんな! 有人様はゆっくり休んでください!」

「何言ってるんですか、僕は家族でしょ? させてください」

嬉しそうな表情になる一美さん・・・

ちょっと心が痛むけど、こうでも言わないと手伝わせてもらえない、

できるだけ三久ちゃんの所へ行かないようにするには、こつでも言わないと・・・

「僕はまず自分で食べたこの食器を洗いますから」

「そうですか、では私は食材を選びますわ」

「はい、よし、がんばるぞー!」

頑張って、この家から出るんだ!

この、淫魔の館から・・・!!

6日目（1）

6日目の朝、朝食がはじまった。

「いただきます」

「いただきますーす」

「いただきますあす」

「いただき……ます……うう」

今朝も三久ちゃんは僕の膝の上に座って朝食を……

おしりで僕のモノをもてあそびながら……お、おおきくなるう……

に、逃げようと、き、決めたのに……こ、興奮しちゃうう……

「おにいさまあ、は、コロッケえ」

「う、うん……もぐ……ん……」

プルルルルル・・・プルルルルルル・・・

電話だ、一美さんが出る。

「はい・・・はい・・・少々お待ちください」

うつうつ、三久ちゃんの左手が、僕の膝にい！！！！

「有人さま、お電話ですわ」

「ぼっ、僕にですかっ！！」

「あんっ！！」

三久ちゃんを持ち上げどかさ僕、あ、あぶなかった・・・

あわてて電話に出る・・・そこから聞こえた声は・・・

「おう、わしじゃ」

「じ、じいちゃん!？」

「よく聞け、明日、約束の一週間じゃ、早朝にリムジンを美麗家の前に待たせる」

「早朝・・・夜が明けたらですか」

「うむ、夜明けから朝8時まで待たせる、それまでにそこを出て行きたければ乗るがよろう」

「わ、わかりました、その・・・」

「ではの」

プツツ・・・ツー、ツー、ツー・・・

切れちゃった・・・

明日か・・・明日、ついに自由に・・・

それまで、三久ちゃんから逃げ切れば・・・!!

「おにいさまぁ、どうしたのお？」

「い、いや、ちょっと、ね」

「三久に隠し事は無しだよぉ」

よく言うよ、偽りの愛のくせに。

・・・よし、こう思えるって事は、

僕の心はまだ完全には三久ちゃんのものになってないんだ、

いいぞ、このまま三久ちゃんから心を引き剥がしていけば・・・

そして、くすぐられないようにすれば、あと1日で逃げ切れるんだ
！！！！

「では有人様、後はよろしく願いしますわね」

「姉さん、バスもう来るよ、早く！」

「もう二恵つたら・・・三久、有人さまに迷惑かけるんじゃないわよ」

「はあい」

「明日の夕方には戻りますので、それでは・・・」

「い、いつてらっしゃい・・・」

「バス来たよー!」

あわただしく家を出る一美さんと二恵さん・・・

見送る僕と三久ちゃん、これで明日の夕方まで2人つきり・・・

いや、明日の朝には僕はもうこの家を去るんだ、それまでの我慢・・・

「おにいさまぁ・・・うふふ・・・」

「・・・っ!!」

「これでまた1日中、くすぐってあげられますう」

「ちょ、ちょっと外へ・・・」

「その顔ですかあ？」

・・・しまった、そうだ、

僕の顔や全身には三久ちゃんおきついキスマークがびっちり・・・よく考えたら、一美さんや二恵さんにこの顔を見られてたんだ、今になって恥ずかしい・・・

「ねえおにいさまあ、今日はまず遊ぼうよお」

「・・・」

「ねえ？あとでいっぱいいくすぐってあげますからあ・・・」

「・・・」

「そしてそのあと、三久の中に入れちゃったからあ・・・だから、ねえ・・・」

・・・逃げろ！！

「あつ！おにいさまあー！！」

猛ダッシュで屋敷の奥へ逃げ込む僕、

捕まったら最後、三久ちゃんの指技で快楽の底無し沼に……！！

もう絶対にくすぐられないと誓ったんだ、魔の快楽に打ち勝ってみせると……！！！！

「……ぜえ、ぜえ、この部屋は……」

ガチャガチャガチャ

「だめだ！鍵が……こつちは！？」

ガチャガチャガチャ

「駄目か・・・こんなに部屋があるのに・・・!!」

廊下の向こうから三久ちゃんが駆けてくる!!

「鬼ごっこお？嫌いじゃないですよ」

「やばい!!」

ダダダダダダダ・・・

本気で逃げる僕、捕まったら最後、

あっという間にくすぐられてもう一生餌食になってしまう!!

完全に虜になった後、捨てられたらもうボロボロの廃人になってしまっただろう、

いや、捨てられなくても、くすぐり中毒になってしまった時点ですでに廃人・・・そんなの嫌だあ!!

「あんっ、待ってくださいあい」

「ひ、ひいいー！！！！」

2階へ逃げる・・・

開いてる部屋、開いてる部屋は・・・

はやくしないと三久ちゃんが来ちゃう、くすぐられちゃう！！！！

「そっちは行き止まりですよ・・・おにいさまあ・・・」

「あ・・・あ・・・ああ・・・」

冷や汗がダラダラ出る、

甘ったるい、くすぐったい声が近づいてくる・・・！！

仕方がない、こうなったらここに入るしか・・・ドアよ開いてくれっ！！

ガチャッ！！！！

「開いた!!」

中に飛び込み力チャ、と鍵をかける!

ここは・・・淫猥なるくすぐり悪魔の巣、

僕が身も心も調教された、三久ちゃんの部屋だ!

「鍵かけても無駄ですう、三久の部屋なんですよぉ・・・」

ドアの向こうの甘い声・・・

どうにかしなきゃ、とりあえずドアのノブを握って、

力で開けられないように・・・こういう形での力比べなら絶対負けないはずだ!!

・・・

ドアの向こうが静かだぞ？

あきらめたのか？それとも油断させるため？

まさか窓から入ってきたりは・・・と思ったら！！！！

「みいーつけた」

「うわあ！！！！」

ぶらんと逆さにぶらさがって顔を覗かせる三久ちゃん、

屋根から・・・や、やばい！窓の鍵を・・・もう間に合わない！

するりとその身軽な動きで部屋に入ってきてちゃった、逃げなきゃ！
ドアを・・・

ガチャガチャガチャ！！

「あ、開かない！？鍵は開けたはずなのに！！」

「支っかえ棒しといたのお」

「ひ、ひいい、た、助けて・・・」

幼くもエロティックな表情で近づいてくる三久ちゃん・・・

どこか逃げる場所は・・・あ、あそこだっ！！！！

「あ、おにいさまっ！？」

ガチャ、ボタン！！！！

僕はとつさにそばのクローゼットを開け、

中から閉じた！扉の内側についているリボンがいつぱいかけてある
取っ手を、

全力で握って閉じる僕・・・真っ暗な中、かけてある三久ちゃんの
洋服に挟まれながら！

「ずるうーい、そんなところ入っちゃあ・・・」

「も、もつくすぐられないぞ！絶対に！！」

助かった・・・

これで抵抗できる、

このままここで明日の朝まで籠城すれば！！

「おにいさまあ、出てきてよあ」

「い、嫌だ！もう絶対、くすぐらせないぞ！！」

「三久のこと、嫌いなのお？」

「そんなこと言って、三久ちゃんだって僕のこと、好きじゃないだろ！？」

「好きですよあ、おにいさまのことあ・・・本当ですよ」

「そんな調子のいいこと言って、金が欲しいだけなんだろう？」

「違いますう！おにいさまが欲しいんですう！本当に本当ですよ！！」

・・・まあいいや、

どっちみちこれでもう出て行くんだから・・・

それにしてもこのクローゼットの中、クラクラする・・・

三久ちゃんの甘い甘あゝい洋服に囲まれて・・・いい匂いがあ・・・
いけない、力を抜いちゃあ・・・なんとかこのまま丸1日、耐え切るんだ!!

「もう・・・おにいさま、絶対に出てきてもらうんだからあ!!!!」

真っ暗なクローゼットの中・・・

かろうじて隙間から光が射しているものの、

外の様子はわからない・・・とにかく腕の力を抜かないようにしないと・・・

グイッ！！

「おつと！」

ふいに扉が開こうとする、

三久ちゃんが外から開けようと・・・

だから油断はできない、手を握り直す、汗がにじむ・・・

「ねえおにいさまぁ、もう出てよぉ・・・」

「・・・・・・・・」

「もうすぐお昼だよぉ・・・」

出るもんか、絶対に！！

「出てきたら、たっぷりくすぐってあげますよぉ・・・」

「・・・・・・・・」

「思い出してください、こちょこちょされるのって、すごかったでしょう?」

「・・・・・・・・!」

「泣きながら約束してくれたですよねえ、結婚してくれるって・・」

「・・・そ、そんなの、無理矢理言わされただけっ・・・・・・・・!」

「そうですかぁ?とおっても喜んでたのに・・」

「い、言うなっ!お、思い・・・出したくないっ!」

しかしすでに激しく勃起して思い出してしまっている僕・・・

「おにいさまぁ・・・起っちゃってるでしょぉ?」

「!」

「もっともっと思い出させてあげますぅ・・・」

そう言った直後・・・！！

「こちょこちょこちょこちょこちょ・・・」

カリカリカリカリッ！！！！

「なっ！？」

三久ちゃんがそこから扉ごしにクローゼットの表面を、

くくすぐっているっ！？それがカリカリと音を立てているっ、

この攻撃はぁ・・・だ、駄目だぁっ、お、思い出しちゃっつっつっつ！！！！

カリカリカリカリカリカリカリ・・・

「や、やめてくれえ!!」

全身がムズムズするう!!

力が抜けるう! 脳裏にあの麻薬のような快感が、

フラッシュバックして・・・扉ごしに本当にくすぐられているみたいだあ!!

「はやくう、くすぐらせてくださあい・・・こちょこちょ・・・」

「あ、ああ・・・あああ!!!!」

カリカリカリカリカリ・・・

僅かに伝わる扉ごしの振動・・・

これが、これが、くすぐったさを掘り起こすには、

もうそれだけでじゅっぶん・・・!! ひ、ひ、ひいひいひい!!

6日目(2)

ぐいつ!!

「うわあ!!」

ガチャ!! バタン!!

危なかった、一瞬、扉が開いてしまった、

あわててまた閉めたけど・・・なんて恐ろしい攻撃なんだ!!

「もお・・・おにさまあ・・・」

カリカリカリカリカリカリカリカリカリ・・・

「あ・・・あ・・・ああああ!!!!!!!!」

リズムミカルな音が僕を精神的に追いつめる！

股間がズキン、ズキンと疼いてたまらない！！

でも、耐えるんだ！耐えて、必ず自由を手に入れるんだああ！！！！

・・・うう、もうどのくらい時間が経ったのだろうか？

隙間から挿し込む外の明かりがなんだか蛍光色になった気がする、もう夕方過ぎ？夜？いや、まだ昼間なのか？腕時計でもつけていれば・・・

「おにいさまぁ」

甘い声が外から・・・

ん？、「これは、おいしそうな匂いが・・・」

「お食事作ってきたのお、食べてえ」

ぐうー・・・

お、おなかが鳴ってしまった・・・

「ね？おにいさまぁ、お食事にしましょうよぉ」

う・・・た、食べたい・・・

「開けるねえ」

ぐいっ！とクローゼットに開く力が加わる！

それをぐつとこらえる僕！あ、開けさせてなるものか！

「おにいさまあ、どうしたのお？こはんだよお」

「ほ、ほつといってくれっつ！..」

ぐきゅるうつうつー... ..

「おなか鳴ってますよお、ちょっと休憩しましょうよお」

「きゅ、休憩？」

「そうですっ、くすぐったりしませんからあ... ..」

休憩... ..一時休戦かあ... ..

い、いや！騙されちゃ駄目だ！

これは絶対罠だ！くすぐられたら、次くすぐられたらもう終わりなんだ！

「い、いいよ！三久ちゃんだけで食べてよ！」

「えー？有人おにいさまと食べたいのお、ねえ」

「いいから！ほつといて！あっち行って！！」

・・・静かになる室内。

おいしそうな匂いだけが隙間から入ってくる・・・

「・・・おにいさまあ、三久、ほんとうにおにいさまが・・・好きなんです」

「う、うう、うそばかり！！」

「本当ですよ！！本当に・・・おにいさまが・・・おにいちゃんができたみたいで嬉しかったし・・・

ずっと、ずっと憧れてたし・・・好きでないと・・・三久、好きな人でないと、あんなことしないもん！」

悲しげな声だ・・・

「おにいさまが来て・・・本当に嬉しかったの・・・それまでは・・・
三久、本当に心から嬉しかった事って、ずいぶんなかったの・・・
パパもママもほとんど三久の相手してくれないし・・・お姉様たちも・・・」

う、涙声になってきたぞ・・・

「三久、みんなの前では笑うしかなかったんだもん！
だって、だって、そうしないと、耐えられない・・・んだもん・・・
変なおじちゃんたちにいっぱい体中さわられて・・・あそこに入れられて・・・」

それでも、笑ってなくちゃって・・・でも、おじちゃんたち、本当に三久のこと好きな人っていなかった！三久だって、気持ち良くなんてなかったし、

でも、気持ちいいって言わなきゃって・・・好きでもないおじちゃんに、もう、

されるのは嫌あ・・・おにいちゃん、お願い・・・三久を・・・助けて・・・」

悲痛な叫びだ・・・

やっぱり三久ちゃんまでも、

家を守るために、幼い体を・・・

「ぐすん・・・ぐすん・・・えーーーーーん・・・」

あーあ、泣き出しちゃった・・・

まだ13歳だもん・・・可哀相すぎる・・・

助けてあげたいけど・・・でも、助けて欲しいためにやってた事・・・？

僕をくすぐり調教したのは、やっぱり捕えて裕福になり、体をこれ以上汚さないため？

じゃあ、やっぱり愛なんてないじゃないか・・・同情でほだされてたまるか！！

「おにいさまあ、好き、好きい・・・」

もう信じないぞ！

「ねえ、何も言ってくれないのお？本当に好きなの、だから、おにいさまに助けて欲しいのお、おねがいい・・・」

クローゼットに貼り付く三久ちゃん・・・

ぐじゅぐじゅ泣きながら懇願してくる・・・

でも、でも僕はもう何も答えない・・・何も言えない。

「おにいさまは違ったもん、三久、おにいさまには本当の笑顔になれたし、

おにいさまにしてもらったのが、今までで一番気持ち良かったもん
！！！！

おにいさまをくすぐっている時も、今までで一番ぞくぞくして気持ちよかった！

おにいさまは三久の一番好きな王子様なんだもん！本当だもん！好きだもん！

おにいさまのためなら、三久、三久、何だってするから、だから・結婚してえ・・・」

うつ、僕までもらい泣きしてしまいそうだ、

どうしよう、情にほだされてしまっている・・・

たった1週間足らずでも、あれだけ一緒にいて、

くすぐられ続けたり、Hなことをされたんだから、

感情移入してしまうのはしごく当然のことだ、でも・・・

「・・・三久ちゃんごめん、その想いには、応えられない」

「いやあ！三久は、三久は有人おにいさまと、結婚したいのお！！」

「資金援助については、うちのじいちゃんによくお願いしておくから・・・」

「そんなんじゃないの！！おにいさまが欲しいのお！おにいさまの愛が欲しいのお！！」

「・・・愛は、三久ちゃんが本当に結ばれるべき相手から、もらって欲しい・・・」

「おにいさま、愛くれたもん！三久、おにいさまの愛、いっぱい感じたもん！」

「あ、あれは・・・単なる肉欲だよ、快感に操られていただけだよ！！」

「おにいさまあ・・・三久、好きだからしたのに・・・おじちゃん相手みたいにいやいやじゃないよお」

「・・・これいじょう小悪魔の声に耳を貸すのはよそつ、

僕の心が揺らいじやうから・・・もう、黙って、とにかく朝まで踏ん張ろう。

「おにいさまあ、好きい、だあいすきい・・・」

・・・もう夜中かな？

多分そうだろう、僕は汗をたらしながらまだ頑張っている、

相変わらず気が抜けない、なぜならば・・・

ぐいつつ！！

ま、まだだ！！

シーンとしていても、

ふいにすごい勢いで扉が引っ張られる！

ずっと三久ちゃんが貼り付いているんだろう、

ランダムに引っ張られちゃうから一瞬も油断できない！！

「・・・う、トイレ行きたい・・・」

「おにいさま！トイレですかあ？休戦しますっ？」

「い、いや、いい・・・」

「んつと・・・じゃあ花瓶入れましょうかあ？」

「う・・・いいよ！受け取ろうと開けた瞬間捕まったら・・・嫌だから」

「じゃあ三久、10分ぐらい外へ出てますねえ」

「え？ほ、本当？」

「はあい、嘘はつきません！」

「本当に本当に本当？」

「じゃあ行つてきまあす！」

・・・ガチャ！

三久ちゃんの部屋のドアが開く音がして・・・

タッタッタ・・・トントントントントン・・・

廊下を歩き、階段を降りるリズムカルな音が！

ほっ、本当に降りて行っただ？三久ちゃんが？？

大丈夫・・・かな？10分しかないなら早く出ないと・・・

・・・でも罨かも？階段を降りた所で捕まえるという・・・

ならこの部屋で、それこそ花瓶に出すとか？そうだ、

一瞬外へ出て、花瓶か何かを取ってまた本へ戻れば、

ここでだってできる・・・そうと決まれば早く！三久ちゃんが戻る前に！

・・・で、でも、開けられない・・・こ、怖い！

開けるのが怖い、三久ちゃんはせっかく下に降りたというのに、

ずっと扉を引っ張っていたから・・・いざ手を放そうとすると、たまらない不安感が！

これも三久ちゃんを本気で恐れているから、くすぐり中毒で心身ともに食い尽くされるのを、

本当に恐がっているから・・・うう、せっかくのチャンスなのに、せっかくの・・・まだ戻ってきてない、今のうちにい！

ぐいつっっ！！！！！！

「えええっっ！？！？！？」

ひとときわ強い、クローゼットの扉を引く力！

な、何？何があつたんだ？扉が少し開いた！眩しい！

三久ちゃんの顔が！やばい！渾身の力で扉を思いっきり閉める！！

ボタン！！

ひ、ひ、ひい！

あぶなかったあああ！！

なんで？三久ちゃん、下へ降りて行つてはずなのに！？

「もう・・・あーあ」

「三久ちゃん！降りたんじゃあ!？」

「おにいさまあ、もう出て来てよお・・・」

やっぱり罨だった・・・

す、少しちびっちゃったかも!？

さっき、確かに階段を降りて行く軽い音が・・・

「ひょっとして、他に誰がいるの!？」

「もう！おにいさま！早く出てこないと許さないんだから!！」

バン！バン！

「う、うわ！そんなにたたかないで!」

「出てこないとくすぐりで殺しちゃうんだから!！」

「殺すつて、三久ちゃんそんな言葉使っちゃ・・」

バン！バン！バン！バン！バン！

きゅ、急にヒステリックになった！

これが、ひょっとして本性、なのか！？

グラグラグラグラグラ・・

「揺らさないで！あ、あぶないよっ！わわっ！！」

「おにいさま！今、出てきたら最高に気持ち良くてくすぐってあげますう、

でも、まだ出ないんだったら、くすぐりすぎて殺しちゃいますからあ！――！」

「おちついて！三久ちゃん！おちついて！」

「おにいさま、朝になって、どうやって出るつもりですかあ？」

三久、新体操やってるんですよ、出たらすぐに捕まえて、くすぐり殺しちゃうんだからあ！」

ドカ！ドカ！ドカ！

蹴ってる！すごい勢いで乱暴に！

こんな子だったなんて、ショックだ！！

思っようにならないと、こんなに豹変しちゃうなんて・・・

結婚なんてしたら、とんでもない暴力妻になってしまうかも？

これはますます出られない！三久ちゃん、逆効果な事を・・・！！

「今、出たら許してあげます！さあ、すぐ出てください！！」

「う、い、いやだ」

「逃げられると思ってるんですか？もう、逃げられないんだから！」

恐い・・・ち、ちびっちゃん！おしっこ漏れちゃう！

どうしよう、ぶるぶる体も震えてきている、我慢できないかも・・・

はっ！まさか三久ちゃん、これを計算してわざと乱暴を？いや、まさか・・・

バンバン！バンバンバン！

三久ちゃんの一瞬見えた顔・・・

まさに小悪魔だった・・・もう信じないぞ！

こんな恐い女の餌食に誰がなってなるものか！！

ぐいっ！ぐいっ！ぐいっ！

「くそ！くそ！耐えてみせるぞ！」

「おにいさま、おにいさまは絶対、三久と結婚するんだからあ!!」

6日目〔3〕

．．．．

そろそろ．．朝かな？

耳を澄ます．．外の音は．．聞こえない．．

静かだ．．三久ちゃんがいる事は確かなんだけど．．

たまにぐいつ、って引つ張られるから．．でも．．静かすぎる．．

「ん．．．ん．．．ん．．．ん．．．」

何か聞こえてきたぞ？

「．．んっ．．おにい．．さまあ．．．」

三久ちゃんの声だ、やけにか細い．．？

「好き・・・んっ・・・好き・・・」

くちゅ、にちゅっ・・・

こっ、こっ、この音はっっ!?

「おにいさまあ、好き・・・ああっ!三久、いい・・・」

くちゅ・・・くちゅくちゅ・・・

靡ごしに卑猥な声と音が聞こえる・・・

甘く切ない、三久ちゃんの・・・ああ・・・こ、こう来たか・・・

くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ・・・

これは三久ちゃんがすぐ側であそこをいぢってる音・・・!!

「おにいさま、来て・・・三久としようよお、ねえ・・・」

あまつたるゝい誘惑の声・・・

「おにいさまあ・・・三久と・・・してえ」

「つう・・・ううう・・・ううう!!」

ああっ!!

駄目だ! 聞いちゃ駄目だ! 思い出しちゃ、駄目だ!

三久ちゃんのこの喘ぎ声を聞くと・・・あの、調教、くすぐり調教が
あ!!

「出てきて・・・おにいさま・・・一緒に・・・気持ち良く・・・なろうよ
お・・・」

ズキズキズキズキと勃起したペニスがさらに起って痛む！

同時に甘い声で全身をやさしくくすぐられているような感覚があ！

ち、力が抜ける！やばい！全身を鳥肌が・・・ああ・・・声だけで、
い、いっちゃうっ！！

ぐいっ！！

「はああ！！！」

バタンツッ！！

さ、さっきよりさらに大きく扉が開いてしまった・・・

とっさに腕でも入れられたら、大変な事になってたな・・・

ど、どンドンどンドン追いつめられてるう・・・13歳の少女に・・・

「おにいさまあ、はやくう・三久の中に来てえ・・・」

「・・・」

「三久の中でえ・・・気持ちよく、くすぐってあげますからあ・・・」

「・・・」

「んっ・・・物足りないよお・・・おにいさまが・・・いいよお・・・」

「・・・ゆ、言うなーーー!!」

「あんっ・・・おにいさまっ!三久、おにいさまのが、欲しいよお!!」

くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ・・・

「い、いつちゃう!おにいさま!は、はやく!はやくきてえええ!!」

とっさに両耳を塞ぐ僕!

次の瞬間、内扉の取っ手を慌てて両手でつかむ!

三久ちゃんに馬乗りになれて、

徹底的にくすぐられながら射精させられた、

あの激しくとろける指使いが安易に想像できてしまう、

その恐怖のテクニクで今、三久ちゃんは自分のあそこを！！

・その指でそのまま、くすぐり犯されてしまいたいっ！！！！

くすぐられたいっ！！お、墜ちてしまえばどれだけ楽で気持ちいいか・・・・！！

「・・・・おにいさまあ、三久、いつちゃった・・・・でも足りないのお、

おにいさまで、もっともっと、いかせてえ・・・・お願い・・・・もっと、もっとおお・・・・」

うっうっ・・・・むずむずが止まらない・・・・

両脇、首筋、胸、背筋、太股、足の裏、そして股間がむずむずむず、むず・・・・

くすぐられたくってたまらない禁断症状だ・・・・もし朝になって脱出

できても、

このくすぐりトラウマ、後遺症に一生悩まされる事になるかもしれない、ならいつそ・

いや、まだ取り返しがきく！まだぎりぎり大丈夫！あと1回、あと1回くすぐられたらそうなってしまっけど、

今、この状態でもう2度とくすぐられなければ、絶対に元に戻るんだ！正常な性感に、狂わされる前の状態に！！

くうう、の、喉が激しく渴く・水が飲みたい・トイレも行きたい・・・あと何時間我慢すれば朝になるんだろっ・・・

「おにいさまあ、せつないよお、くすぐらせてよお・・・」

「・・・・・」

「三久、いいもの用意したのお・・・」

「いいもの？用意って・・・！？」

「これえ・・すっごおいくすぐりたいよお・・・」

な、何だろう!?

「車の掃除するやつ・・・やわらかい羽根がいっぱいあるよお」

「え!？そ、それって・・・あ、あれ!？」

「そっだよお、これでおにいさまの股を、こしょこしょしてあげる
う」

ひ、ひ、ひiiiiiiiiiiii!!

「ほおら、ふさひさあ・・・」

しゅるしゅるしゅるしゅる・・・

こ、これは、大きいあの車の室内の埃を取る羽根の棒・・・

正式名称なんだっけ・・・とにかくあれを、クローゼットの扉に、

回転させながらくつつけてるう!しゅるしゅるとした羽根の擦れる

音が、

た、たまらなく気持ちよさそうだあ！あれで全身をやられたら、もう、ひとたまりもなく虜に！

しかも三久ちゃんあのテクニクだ、やわらかい体を生かしてものすごい速さで全身のあらゆる個所を・

股を回転させながら責められたら、2秒もしない内に瞬時に射精させられそうだああ！！！！

「ん・・・三久で試すねえ」

扉にまとわりついていたしゅるしゅるの音が消え、

しばしの静寂の後に聞こえてきたのは・・・・・・・・！！

「はああん！これえ、すっごくおい！-」

しゅるしゅるしゅるしゅるしゅる・・・

くちゃ・・・くちゃくちゃくちゃくちゃくちゃくちゃ・・・・・・・・！！

微かだけど、わ、わかる！

三久ちゃんがそれを股に挟んで回転させているのがあー！！

聞こえてしまう！わかってしまう！見たい！そして、僕もされたあ
い！！！！

「す、すーおーい！もっういっちゃんうー！いっちゃんうー！いくっうううううう
ううう……」

[illegible]

「……あ……はあ……ん……おにいさま……さあ……出てきてくださあい、

そして、ここによつんばいになってくださあい、これをおにいさまの股に挿し挟んでえ、

こしょこしょ前後にくすぐりながら、背中もくすぐっていかせてあげますからあ・・さあ・・」

うつつ！なんて気持ちよさそうな事を！！

そんなことされたら・・・無防備なおしりの穴もくすぐられそうだ・

・

じゃない！そんなことされたら、もう、完全に三久ちゃんの性奴隷にされてしまうつつ！！！！

「はあん！これ、おっぱいも気持ちいいよお！！」

まだあれで遊んでるのか・・・

うつ、三久ちゃんが自分でたっぷり遊んだあれを、

今度は僕の全身に・・・されたい！毎日されたい！一生されたい！！

「三久ね、まだまだいっぱい、おにいさまが喜んでもらえるの、用意してるのお、

これだけじゃないですつ、もっといっぱい・・・ぬるぬるするのとかパウダーとかあ、

いっぱいお姉様に買ってもらったのお、ねえ、三久と一緒に、ずっと一緒に遊ぼうよお・・・」

くらくらするような誘惑・・・

自由と引き替えに永遠の快楽を手に入れるのもいいかもしれない、逆にこれが僕にとって最高の快楽付けになる、最後のチャンスなのかも・・・って駄目だ駄目だ！

こんな一時の欲望で早まってはいけない！用済みになったら捨てられてしまうかもしれないんだ！

耐えて見せる！誘惑にも、痛い勃起にも、このくすぐりの禁断症状にも！！！！！！

「ああん！くしゅくしゅして、きもちいいよおおお！！！！」

耐えて・・・みせ・・・る・・・うう・・・

．．．．．うつ、もう朝かな？

まだ0時にもなっていないような気もするし．．

ああ、く、くすぐられたいよおお．．むずむずむずする．．

おしっこもしたい．．ここでしちゃおうか．．後で弁償すれば．．
でも．．

ふんばってないと開けられちゃう．．おしっこ中に開けられたら、
閉める力が入らないかも．．

「．．．．．おにいさまあ．．ぐす．．お願い．．三久を、助けて
え．．

おにいさまのためなら．．何でもしますう．．だからあ．．ぐすぐ
すぐす．．．」

また泣きおとしか．．

「わかったよ、じゃあ僕が自由になったら、三久ちゃんに仕送りす

るから」

「嫌あ・・・おにいさまが欲しいのお・・・おにいさまと結婚したいのお・・・」

「僕は三久ちゃんのこと、そんなに好きじゃないから・・・ごめんね、だから、あきらめて」

「そんなあ・・・じゃあ三久、もっともつと好きになつてもらえるようにがんばるからあ」

「もういいから、もうやめよう？ね？もう・・・もう、疲れたよ・・・だから、もう」

・・・なんか、僕の方が弱気になつてきてるみたいだ、

負けるもんか！なんとしてでも・・・気力と体力を残して・・・

そうしないと、朝になつて、外まで逃げ切れないから・・・

ダラダラ流れる汗、鼻をくすぐる甘い三久ちゃんの服の匂い・・・

爆発しそうな膀胱、として精液の詰まったあそこ・・・でも気が抜けない！！

ぐいっ！！

「ああおー!!」

今、手の汗でつるつ、と指がすべって、

あやうく放しそうになった・・・やばい!と、ぎゅつと持ち直す、

もう・・・おなかも空きすぎて・・・痺れて力も入らないけど・・・ふんばらないと。

「・・・もうわかったあ、三久、寝るねえ」

え!?

パチツ、と隙間から漏れていた明かりが消える、

ガサゴソとシーツに潜り込むような音が・・・本当に寝るのか!?

「おにいさま、おやすみなさあい・・・」

おやすみって・・・

あきらめてくれたのか？

確かに夜遅いなら三久ちゃんの体力はもう限界かも・・・

僕だってもう限界・・・ふわあ・・・ほんとに眠いや・・・力が抜けるのも当たり前・・・

朝になったら・・・車に逃げ込んだら・・・すぐに寝よう・・・いや、トイレの方が先か・・・

・・・クー、クー、クー・・・

三久ちゃんの寝息が聞こえる・・・

本当に寝たみたいだな、もう・・・よかった、

どうやら助かりそうだな、さて、どうしようか、

廊下へ出るか・・・いや、罠の可能性もじゅうぶんある、

でも出るなら体力がまだ残っている今のうちに脱出してしまった方が・・・!?

・・・カクッ、と首が落ちる、

眠い・・・うつらうつらしてきたぞ・・・

そうだ、せめて隙間から今の時間を見れば作戦が練れる・・・

ぐいつつ!!!!

「あいつ!!!!」

また引つ張られる!!

ね、寝たんじゃないのか!?

ベットの上からどうやって・・・やっぱり2人いる!?

「だ、誰だ!?!」

・・・返事はない。

くそー、2対1なら不利すぎる、

なんとかしないと、なんとか考えないと・・・!!

6日目〔4〕

「・・・おなかすいたあ」

トン、とベットから降りる音・・

三久ちゃんが起きたみたいだ、

足音が近づいてくる・・カチャ、と食器の音が・・

「おにいさまあ、おにぎりもらうつねえ」

もぐもぐもぐ・・・

食べてる・・・うつ、僕も食べたい・・・

ぐうつうつ~~~~・・・

「おにいさまも一緒に食べようよお」

行かないぞ！絶対！

「ねえ．．もう三久、あきらめたからあ．．」

全然あきらめてないくせに！

「最後に一緒にごはんたべようよお、ねえ．．」

油断してたまるか！いつ、いつ、また、ぐいっと．．．！！

「電気つけるねえ．．ん．．んん！！！！」

ん？どうした？

「お、おなかいたい・・おなかいたあい!!」

「・・・え!？」

「おにいさまあ!お、おなかいたいよお!!」

ど、どうしたんだ!?

「おなかいたあい!げほっ・・い、いたいよお!おたいよお!!」

「三久ちゃん!？」

「た、たすけてえ!おにいさまあ!たすけてえええええー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

た、大変なことになってる!!

三久ちゃん、ひょっとして、食中毒!?

「おなかがあ!いたあい!だれか・・た、たすけ・・げほっ、げほっ」

どたばた、と、のたうちまわっている!?

助けなきゃ! すぐに救急車を・・・って、腕が痺れて開けられない!?

そんな馬鹿な・・・助けないと! 緊急事態だ! 三久ちゃんを・・・三久ちゃんを!!!!

「うう・・・おにいさま・・・はやく・・・たす・・・けて・・・」

・・・いや待て!

また、罨かもしれない・・・

って、そんなこと言ってる場合か? これは!?

「三久ちゃん、大丈夫!？」

「たすけて・・・たすけて・・・たすけて・・・」

．．．．．れ、冷静になれ！

よく考えてみよう、もし罠なら．．．

これは僕の一生を左右する大切な瞬間なんだ！！！！

本当に苦しんでるなら．．そうだ、三久ちゃんの他にもう１人いるはずだ！

その人が助けるはず．．．やっぱり罠か？そういえば食べて苦しむ時間が早すぎるような．．

「た．．す．．け．．．」

「三久ちゃん！もう１人いるだろ？その人に．．」

「．．．お．．．に．．．さ．．．ま．．．．．」

．．．．．静まり返る部屋．．

大丈夫か！？これは．．これは、これは、

僕は本当にこんなことしていいのか！？

三久ちゃんが、ひょっとしたら死んでしまうのかもしれないんだぞ！？

何も食中毒とは限らない、盲腸だとか、他にも何かの病気かもしれない……

でも罨だとしたら、

飛び出したらすぐに胸元に潜り込まれて、

あっという間にくすぐり無限地獄へ引きずり込まれてしまう……

今の僕ならあとほんのちよつと、こちょこちょとくすぐられるだけで、

もう三久ちゃんの完全な所有物になっちゃう、そのための罨という可能性も……

「三久ちゃん？三久ちゃん？」

「……………」

返事が無い……

気絶しちゃったのか、それとも……

物食べてる途中の気絶なら、窒息死しちゃう！！

でも、作戦だったとしたら、僕の一生がそこで終わってしまう、

くすぐりという餌で働かせられる性奴隷になってしまう・・・それも嫌だあ・・・

とにかく朝まで待たないと・・・

隙間から光りは入ってきてない、

まだ夜中なんだろう・・・って、カーテン締め切られてたらわからないんじゃない？

いや、黒い暗幕でもしてないかぎり、朝日はわかるはず・・・それまで待とう、

もし事故が本当なら・・・三久ちゃんが悪いんだ、何度も罠で騙そうとしたから。

「・・・三久ちゃん、朝になったら助けてあげるから、それまで我慢してね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ごめんね」

あやまる僕・・

不安が襲う、同時に眠気と尿意と疲労と空腹と喉の渴きと、

全身のムズムズ感、すなわち、くすぐられたい禁断症状も・・！！

・・・・・・はっ！うとうとと寝てしまっていた！

ぶらーんと下がっていた手を上げ、慌てて取っ手を握る！

もし、もし寝ていた間に開けられていたら・・・・・考えるとぞつとする、

でも、どのくらい眠っていたんだろう？もし三久ちゃんの苦しみが芝居だったら、

もうとつくに開けられていたかもしない、って、それじゃあこれは、本当に！？

様子だけ見ようかな・・・

でも、扉のそばで誰か待ち構えているかも・・・

とにかく朝までは我慢だ！朝になって・・・迎えの車が来る頃までは・・・

・・・

・・・

・・・静かだ、静かすぎる・・・

あうあうあう、全身のムズムズがひどくなってる、

まるで蜘蛛が這ってるみたいに・・・これってまんま麻薬中毒じゃないか！

三久ちゃんのくすぐりって、まさに麻薬だったのか？あんなに気持ちいいんだもん、

麻薬以上にすごいかも・・・もし逃げ切っても、一生この感覚がつきまとうてしまうのか？

いや、麻薬ならなおさら抜けられるはずだ、

僕の精神力なら・・・なんとかなる！なってみせる！！

ここまで耐えたんだ、これから先も、ずっとずっと耐えてみせるさ
！！

・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

もういいかげん朝だろう？

でもまだ外から光りは入ってこない・・・

三久ちゃんの息遣いも聞こえない？まさか？

息を殺しているのか、それとも、まさか・・・よ、よそつ、

そういう事を考えるのは朝になってからだ！それまでは、とにかく我慢！

・・・トイレ行きたい・・・

何か食べたい・・・もう眠りたい・・・

疲れた・・・早く出たい・・・汗も気持ち悪い、お風呂・・・

勃起ももうずっと邪魔だ、はやく抜きたい・・・くすぐられたい！！

いや、最後のは余計だ、もう僕は、くすぐられる事はないんだから・・・！！

・・・もうすぐ自由だ、

僕の好き勝手にできるんだ、

堅苦しい家になんて縛られる事なく、

思いのままの人生を突き進む事ができるんだ！

あともうちよつとで・・・もうちよつとなんだ、だから・・・

だからこんなに苦しいんだ、でも、それだけ努力すれば報われる！

じいちゃんには課題をクリアした褒美にもう1つ、この家の事もお願いしとかないと・・・

きつとあのじいちゃんのことだ、僕をこの家に囚う事を失敗した罰として潰してしまうだろう、

そんな事をしないように約束させなくっちゃ・・・そして貰った莫大なお金でこの家を少しは助けよう。

・・・いや、いざ逃げたらもうそんな事はどうでもいいかも？

敗者は敗者らしく潰されていくのみ、2人の兄ならそう言うだろう、僕だって人生を奪われてしまう所なんだ、それに打ち勝った以上は勝者として、

もうこの家の事なんて綺麗サッパリ忘れるべきかもしれない、うちの家ではそれが正しい。

ひよっとしたら美麗家をここまで助けていたのも、今日のこの日のためなんじゃあ？僕を囚うために・・・

「・・・・・・・・朝は・・・・・・・・まだ・・・・・・・・か・・・・・・・・な・・・・・・・・」

思わずつぶやく僕・・

うう、声を出しちゃったからよけいに喉が渴く・・

ごくん、と唾を飲み込む・・このタンスの中に飲み物なんて・・

こ、これはラムネ？いや、防虫剤だ・・そりゃそうだ・・ううう・・

・

トイレ行きたいよお・・お布団で眠りたいよお・・早く・・朝に・・
なってくれ・・

・・

・・

・・

「あれ？こ、これは・・・」

隙間から光が差し込む・・・

この光り・・・電灯とかじゃない、

自然な明かりだ・・・やわらかい感じのする、

独特の明るさ・・・これって朝日なんじゃあ？

見れば見るほど、感じるほど、自然な明るさ・・・朝日だ！！

やった！ついに朝が来たんだ！！

そつえばさつき、車が通る音がした、

夜中でも車は通るから珍しくはないんだけど、

朝に来た車となると、これはもう僕の自由へのお迎えに違いない！

とうとう、とうとう僕は耐え切ったんだ！1週間のくすぐり快樂地獄に！！

「・・・三久ちゃん！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕の明るい声にも返事はない、

そうだ、最後の詰めをちゃんとしないと！

どうやって外へ逃げるか・・・相手は2人という可能性もある、

いや、3人以上だってありうる・・・今の僕はもうかなりへろへろだ、

3姉妹で押さえつけてくすぐられたら、瞬く間に狂わされてお終いになっちゃう。

かといって、朝日が挿し込んだ以上、もうここには用はない、

どうやって脱出するか・・・廊下や階段は危険かも、いや、そもそも廊下への扉に鍵をかけられたりしていたら・・・じゃあ窓はどうだろう？

結構な高さだよな、飛び降りたら怪我しそうなくらいの・・・窓だっ

て鍵がかかってるだろう、

ガラスをぶちやぶるのはすごく危険だしなあ・・・そうだ！窓の上だ！屋根には上がれるはずだ！！

三久ちゃんが器用に屋根から窓にぶら下がっていたのを思い出す、
そうだ、屋根へ逃げれば！

そこから雨樋づたいとか、木に飛び移れば！よし、これで行こう！
あとは・・・窓だな・・・

ガラス代ぐらいは弁償できるけど、僕の体の方が・・・そうだ、この
中にある服で武装しよう！！

何でもいいからいっぱい服で体を守れば・・・達磨状態になってしま
えば、三久ちゃんに捕まったとしても、

そうやすやすとはくすぐられない！もう朝になったんだ、外にさえ
出せば、車に乗り込んでそのまま・・・！！

クローゼットの中で三久ちゃんの服を物色する、

手首を守って・・・いや、こんなに着ちゃったら服が邪魔で屋根に上
がれない！

飛び降りた方が早いといえば早い・・・あれ？外の光が強くなった？
完全に朝か？

そつだ、早くしないと、しばらくすると車はまた去って行っちゃうんだ！急がないと！

こつなつたら、素早さに賭けるしかない！出て、窓を開けて、屋根に上がる！素早くだ！

人間、本当にいざとなつたら何とでもできる！

素早さで勝負するなら余計な服は着ない方がいい！

三久ちゃんとか誰かが襲つてきたら心を鬼にして蹴り飛ばすぐらいしなきゃ・・・

窓は丁度朝日が挿し込む場所だ、朝日に向かって、自由に向かって突っ走ればいい！！

・・・ん？風が入ってきている？窓が・・・窓が開いているようだ、こゝこれはチャンスだ！！

バサバサバサバサバサ・・・

よく聞くとカーテンがなびく音が！

間違いない！窓は開いているぞ！ラッキーだ！

もう、もう耐えるのも限界だ、すぐに、窓が開いているうちに外へ出て、

自由を！ついに自由を！あこがれの、僕のための自由を手に入れられるんだ！！

祝福してくれるであろう朝日に向かって、飛び出すなら今しかない！このハイテンションそのままに！！

よし、深呼吸して・・

スーハー・・スーハー・・

行くぞ・・迎えに来ている車へ向かって・・

ドクンドクンと心音が響く・・

・・そうだ！出る時はこの中の服をぶちまけて行こう！

さすが僕だ、眠気と疲労で思考能力が落ちてるという訳じゃないな、逆に頭がさえている！服をばつとぶちまけて相手がひるんだ隙に外へ！！

ときどきときどき・・行くぞ・・行くぞ・・自由へ・・朝日に向

かって・・・！！

でやあ！！

バンッ！！！！！！

どさどさどさっ、とタンスから飛び出る服！

それにまぎれて飛び出る僕！窓の方に向かう！

その僕の目に飛び込んできたものは・・・！！

7日目（1）

「う．．．．．そ!？」

全開の窓、なびくカーテン．

その先に浮かんでいたのは．．

眩しいばかりの、満月だった。

「そんな．．．そんな．．．」

次の瞬間、左からガツ、と飛びつかれる！

「おにいさまあ、つかまえたああ」

「ああ．．．三久ちゃん!!」

なんということだ．．

朝日だと思っていた光りは・・

満月の月明かりだったなんて・・・!!

へなへなと崩れ落ちる僕・・あ・・・ああああ・・・・

じょお~~~~~・・

「おにいさまあ、おもらししちゃってるう・・・」

「あ・・・ああ・・・あああ~~~~~・・・」

じよばじよばと漏らす僕・・

すごい量の放尿を垂れ流す・・

ズボンもパンツもびしょびしょ・・

でも、僕はあまりのショックに安心してどうする事も・・

三久ちゃんがやさしく脱がしてくれる、タオルで拭いてくれる・・

ああっ！勃起したペニスもタオルで拭かれると電流があ！！いいっ

!!

・・・はあっ、はあっ、い、いっちゃんいそだった・・・はあっ、はあっ・・・

「もう、おにいさま、こんなに床汚してえ・・・」

「あ・・・あああ・・・ああああ・・・」

「お仕置きにたっぷりくすぐるんだからあ」

丁寧に拭き取った後、シャツ1枚だけにされた僕の胸にぎゅっと抱きつく三久ちゃん・・・

「おにいさま、やっとおにいさまが、三久のものになるのね・・・」

時計を見ると3時前・・・

まだまだ夜中だったんだ・・・

・ 耐え切れなかった・・・僕は・・・負けてしまったんだ、三久ちゃんに・・・

「おにいさま、ベット行きましょうよお」

満足そうな笑みで僕を引つ張る三久ちゃん、

月明かりでかなり恐く見える、まさに悪魔な表情・

これも作戦か・・・満月の光を朝日と錯覚させる・・・ああ・・・

「おにいさま、ほら・・・お水飲ませてあげますからあ・・・」

「う・・・ああ・・・」

「逃げようとしても無駄ですよお、いつでもすぐにくすぐれるんですからあ」

べったりくっついてる三久ちゃん・・・

僕はもうこの満月を見た瞬間、絶望感が襲い全てをあきらめ、

三久ちゃんに逆らって逃げようなんて気力はまったくなくなっていた・・・

「大丈夫？はい、横になって・・・」

「あう・・・あああ・・・あつ・・・」

ベットに寝かされる・・・

薄暗い部屋をよく見ると・・・

クローゼットの扉のノブに長い紐がついている・・・

ああ、三久ちゃんが寝てた時、ベットからこれを引いてたんだ・・・

じゃあ、廊下から階段を降りた音は何だったんだろう？あれも何か仕掛けが・・・！？

「はい、お水う」

唇を重ねる三久ちゃん・・・

「んっ！んぐっ！んんん・・・」

ちろちろと水が口移しで流れ込む・・・

おいしい・・・喉が潤う・・・唇の横から飲みきれない水がこぼれる・・・

三久ちゃんはさらに水を含んでの口移しを何度も重ねる・・・唇がしびれちゃう・・・

「おにいさまあ・・・うふふふふふふ・・・」

「んはあ・・・三久ちゃん・その・・・」

「おにいさま・・・くすくすくすくすくすくす」

「三久ちゃんには負けたよ・・・その・・・教えて欲しいんだけど・・・」

「なあに？」

「廊下から階段を降りてったのは・・・誰？」

にっっ、と可愛い唇にピンクのパジャマの袖を近づける。

「あれはあ、三久が新体操の練習で使ってるゴムのマリを弾ませて
転がしたんですう」

「そうだったんだ・・騙されるところだったよ」

「おにいさまあ、聞いてくださあい・・・」

僕の耳元で甘える三久ちゃん・・

唯一僕が今、着ているシャツの中にそっと右手を入れる・・

「うっっ!!」

右手を入れる、たったそれだけの行為に電流が走った、

全身の力は抜け、ぶるぶると震え出す、鳥肌がさーっつと立つ。

「三久、おにいさまの事、ずっと好きだったんですよ、

かなり前、三久がまだ小学1年生だった時の夏にい・・・

おにいさまのお屋敷に花火を見に行った時に、お父様やお母様、お姉様たちとはぐれて・

お屋敷の中を迷ってたら、おにいさまが三久を見つけてくれたんですう、

そして、おにいさまのお部屋から、花火を見せてもらったんですう、肩車をしてえ・

「そ、そんな事、あつたっけ・？」

「はい・その時、三久、おにいさまが王子様に見えて・

大きくなったら結婚してくださいって言ったら、おにいさま、笑いながら、

おおきくなってから言ってね、って・嬉しかったのお・

そんな事、あつたっけ・

あってもおかしくないし、僕の言いそうな事だ。

でも、正直、僕に言い寄ってくる少女なんて昔から山のようにいて、僕がまだ10歳ぐらいの頃までは1人1人ちゃんと相手をしていただけ、

それはその子が親に言われて、なんとかうちに気に入ってもらおうと・・・

そついう腹黒い背景に気づいてからは相手にしなくなったんだけど、でも、

三久ちゃんが小学1年の時だったら、そんな事があってもおかしくは、ない・・・

「だから三久、おにいさまが来てくれて、とっても嬉しかったのお、三久、大きくなったでしょ？Hもいっぱいしてるもん、もう大人でしょう？」

だから、だから、結婚して欲しいのお・・・おにいさま・・・結婚してくれそうですよね？」

三久ちゃんの左手が僕の首筋に！！

「はああ！！」

「おにいさま、これでもう終わりです、遊びは・・・鬼ごっこ、かくれんぼは終わりですっ、

おにいさまをいただきます、三久が、おにいさまを、幸せにしますからあ・・・だから、

おにいさまも、三久を、幸せに、してくださいねえ・・・おにいさまあ・・・」

んしょ、とパジャマを脱ぎ出す三久ちゃん・・・

月明かりを浴びながら全裸になる・・・かわいい、綺麗だ・・・

でも瞳は月明かりで光って、なんだか魔物みたいにも見える・・・

「おにいさま、三久の中って、すっごく気持ちいいそうです、そのままくすぐられちゃったら、おにいさま、もう三久から一生離れられなくなりますっ、

これでおにいさまは完全に三久のもの・・・いっぱいいっぱい、ってくださいね・・・ふふふ・・・」

光る目で僕の股間にまたがる三久ちゃん、

敗北者の僕は今、勝者の三久ちゃんのものになろうとしている・・・

い、いやだ！くすぐり中毒になって、一生くすぐり漬けにされるのはあ！！

「おにいさま、すっごい震えてるっ・・・」

「たすけて・・・たすけて・・・たすけて・・・」

首を大きく左右に振る僕！

「おにいさま、三久が苦しんでいる時、助けてくれなかった・・・」

「あ、あれは・・・芝居だった・・・ああうー!!」

ぴとっ、と三久ちゃんのおそこが僕のペニスの先につく!!

「どうしてばれちゃったのかなあ？でもいいもん、もう・・・おにいさまは・・・」

駄目だ！逃げようにも恐怖と快感を待つ欲望で動けない！

もうすでに体がくすぐられたがっている！三久ちゃんに犯されたがつて・・・！！

三久ちゃんの体が前に倒れて両手が僕のシャツの中の脇へとおおお！！

「入った瞬間にくすぐつちやいますね・・・」

「ああ・・・三久ちゃん・・・三久ちゃんん・・・」

「おにいさま・・・三久・・・三久、幸せになりまあす！！」

ずにゅ！と亀頭が三久ちゃんのおそこへめりこむ！

ついに・・・ついに僕は三久ちゃんに捕まって食べられる！

自由が・・・僕の自由が音を立てて崩れていくう！憧れの自由があ！！

嫌だあ！くすぐりに一生縛られて、狂うほどの快感でがんじがらめにされるのはあ！

ああ、飲み込まれていく、自由が、碎けて・・・永遠の束縛が、僕のペニスをおおお！！！！

ず．．．ず．．．ずずず．．．ずにゆにゆっ．．．

「あん！おにいさま、おおきい、きもち、いいっ！！」

「たすけ．．たす．．じゅ．．う．．が．．．！！」

「奥まで．．全部．．入るのお．ん．．んあああ！おにいさまああ
！！」

ずにゆずにゆずにゆずにゆ．．．

目が眩む快感！入っていつてる！三久ちゃんの中に！

ついに！とうとう！締め付けがすごい！どんどんどん．．．あ
あっ！！！

ずぼっ！！！

「あんっ！！」

「うああ！！」

「あひい！あひやひやひい！いひいひい！あひや！あひひやひやあああ～～～！！」

あ～～～つひやひやひやひや！あひい！あひやあ！あひひやひやひいひいひいひい～～～！！

あひあひい！あひやひい！あひいひいひいひい～～～！！
いひ！あひ！ひやひいひい！！

ひひやひいひい！ひやひい！やめひえええええ～～～
ひひやひいひいひい！あああ～～～！！

いひやあ！ぎひやあ！ぎひいひいひい！ひやあ～～～あひあひあひいひいひい～～～！！！！！！」

頭が真っ白になる・・・

あと一歩、もう一歩で手に入っただけの自由が、

三久ちゃんのかわいらしい指で無残に壊されていくっ！！

びゅくびゅくびゅくびゅくびゅくびゅくびゅく～～～！！！！

「あん！いっぱい、いっぱい入ってくるう！！」

さんざんじらされて溜められた大量の精液が三久ちゃんの中へ爆発する！

子宮を射精の勢いでかき回された三久ちゃんの膣はそれに反応しすごい勢いで締め付ける！！

それがさらに僕のペニスから精液を搾り出す事になり、勢いがまったくおさまらない！！

こーちよこちよこちよ、こちよこちよこちよっ、こちよこちよこちよこちよこちよこちよこちよこちよ・・・

こちよこちよこちよこちよおっ、こちよっ、こちよこちよこちよっつー！！こちよこちよこちよこちよこちよ・・・

こちよこちよおおっ！こちよ、こちよこちよこちよっ、こーちよこちよこちよこちよこちよこちよこちよっ・・・

こちよこちよっ、さわさわわ・・・こちよこちよこちよ、つつつつー・・・こちよこちよこちよこちよこちよ・・・

こちよこちよこちよこちよこちよ、くりくりくりくり、わさわささ・・・こちよこちよこちよこちよこちよこちよこちよ・・・

「ひい————っ！あひいひい！ひひいひいひい————！！！」

三久ちゃんのものすごい勢いのくすぐり……

両脇から胸という胸を、背中という背中を、首筋という首筋を、

肘から膝からおなかから、とにかく神経という神経を素早くくり犯してくる！

それが激しい電流となり射精に直結させ、小さな膣のぎゅうぎゅうとした締め付けが相乗効果になり、

僕はまるで首をぎゅうぎゅう絞め殺されるかのように快感で神経を絞め殺されようとしているうううー！

「おにいさま！おにいさま！すごいでしょう？これでもう三久のもですよ！-」

「ごぼっ、ごぼおっ、と膣からごぼれる精液、

それでも相当きつい締め付けから吹き出しているため、

漏れているのはこれでもほんの僅かな量、あとは全て三久ちゃんの子宮へ・・・！！

ドクン！ドクン！ボコボコボコボコボコ・・・

「すごおい！おにいさまの、いっぱいあい！！！！」

びゅるびゅる、びゅぶぶううーびゅうううー！！！！！！

「ひい！あひい！あひええええー！！あひゃひゃひゃひいえええー！！！！」

ぶちっ、ぶちっ、と脳の神経が焼き切れる感覚！

くすぐったさに完全に溺れた僕の神経はもう射精する事でしか逃げようがない！

熱い！三久ちゃんの中が熱い！ペニスの神経も、ぶちっ、と千切れ
そうだああ！！

こんな幼い13歳の少女に・・・人生を・・・奪われた・・・ああ！たま
らない！くすぐったさと！快感があ！！

もう駄目え！狂う！狂っちゃう！狂っちゃってるう！煙が・・・頭か
ら、煙が出るううう！あひやあああ！！！！

「あひい・・・ひい・・・ひああひい・・・ひ・・・ひひい・・・
いいい・・・」

びゅくっ、びゅぶづづ・・・びゅるるるる・・・

子宮に亀頭がロックされたまま、どんどんどん・・・あああ・・・
・・・

もう・・・もう駄目・・・もう逃げられない・・・もう・・・この・・・殺人
快楽からあ・・・ああひいい・・・

7日目(2)

「おにいさまあー三久ー！いいよー！ー！いつてるのおおー！ー！ー！
！！」

「あひ・・・あひえ・・・ひひひひ・・・いひい・・・い・・・」

あまりの快感とくすぐったさに、

もうまともに笑い声さえ出せない・・・

三久ちゃんは僕のをぎゅうぎゅう締め付けながら上下に腰を振って、

イキッ放しになっている・・・それでもなおくすぐりは激しくなる・・・
・！！

すごい指、すごいなめらかさ、ものすごいテクニック！もう、もう、
一生離れられない！！！！

びゅー・・・びゅー・・・びゅっ、びゅっ・・・

「おにいさまあ、もっとおー！もっとおおー！あー！ー！ん！！」

もう三久ちゃんのなすがまま・・・一生こうなるんだ・・・僕は・・・

三久ちゃんの思うがままに・・・一生逆らえず・・・くすぐり犯されるんだあ！！！！

「あ・・・ああ・・・ああ・・・」

両目から涙が溢れる僕・・・

耐え切れないくすぐったさからなのか、

耐え切れない絶望感からなのか、それとも、

耐え切れない快感に喜んでなのか・・・その全てなのか・・・！！

もう、もう何も考えられなくなってきた、気が、気がおかしく、なるうつつ！！！！

「おにいさま、もう疲れちゃったあ？寝てもいいですよお、三久はあ・・・もうちよつとしてるっ」

「ああ！あ・・・あああああああ！！！！ああああ・・・」

三久ちゃんの腰のさらなるヴァイブレーションで、

最後の一滴までもぴゅっ、ぴゅっ、と吸い上げようとしてくる！！

膾炙人口に監禁された僕のペニスはもう、一生抜けられないような感覚に陥れられる！！

こちよーこちよーこちよーこちよーこちよーこちよー

「おにさまの汗ですごくぐりやすいですっ」

「あうううううあ」

もう、何時間くすぐられ続けてるんだろ……

窓の外で待っていたのが僕を逃がしてくれる太陽ではなく・・

僕を通せんぼする満月だったなんて……もういいや……このまま、

三久ちゃんに飲み込まれよう・僕の人生を三久ちゃんに捧げて・
このまま、

一生、三久ちゃんの指で縛られよう。この家に。囚われ。よ。
う。う。う。

「おにいさま・・・好きですう・・・三久と幸せになりましたよう・・・」

[illegible]

びゅつ、
 びゅつ
 ・
 ・
 ・
 ・
 びゅつ
 ・
 ・
 ・

[illegible]

．．．．ん．．

んっ．．あれっ．．んっと．．

朝かな？えっと．．ここは、ベッドの中．．

薄目を開けて外を見る．．明るい！もう昼か．．

時計は午後３時すぎ．．ずいぶんと眠っていたもんだ．．

ぐうゝゝゝ．．

「おなかすいたああ．．．」

「有人さまあ、はい、あーん」

「え？むぐ．．．！！」

口におにぎりを咥えさせられる、

パジャマ姿の三久ちゃん．．おにぎりいっぱい持ってる。

「おなかすいたでしょう？いっぱい作りましたあ」

「ん．．ありがとう、はらぺこだよ．．．んぐんぐ．．おいしい」

「はい、お茶あ．．あ、おにいさ．．有人さま、こぼしちゃった！拭くねえ」

「うん．．ありがとう．．その、三久ちゃん．．．」

「有人さまあ、三久、お嫁さんになったんだから、これからは有人さまって呼ぶねえ」

「う．．わ、わかった．．三久ちゃん、その．．．」

「なあに？おにい．．有人さまあ、出ていたりしないですよね？」

少し不安げな表情の三久ちゃん．．

「．．もう僕は、三久ちゃんがないと生きて行けないから．．

これからずっと、一生、よろしくね、三久ちゃん．．．好きだよ」

ぎゅっ、と抱きしめてあげる．．．

「嬉しい！おにいさまあ、おにいさまあ、おにいさまあ・・・」

「はは、とうぶんはおにいさまでいいよ、その方が僕もいい感じがするから」

「うん！おにいさまは、おにいさまだもんね！おにいさまあ・・・」

涙声で僕の胸に甘える三久ちゃん・・・

ああ、こうなってしまうてよかったのかも・・・

いや、もう、こうなってよかったと思うしかないんだ・・・

「三久ちゃん・・・愛してる・・・」

「おにいさま・・・愛してるう・・・」

「さ、おにぎりもっともらうよ！おなかすいたなあ」

がつがつと頬張る、

丸一日絶食してたんだもん、空くはずだ・・・

ぴったり抱き着く三久ちゃん、幸せそうな表情だ。

「ごちそうさま。三久ちゃん、ありがとう」

「あーごはんつぶう・・・ぺろっ」

「へへ・・・トイレ行ってくるよ・・・あ、その、夕べは漏らしちゃって、ごめん・・・」

「気にしないでえ、もうすっかり洗ったからあ」

「うん、じゃあトイレへ・・・ってあれ？三久ちゃんも？」

僕がベットから立ち上がると、

ぴったり体を密着したまま一緒に立ちあがり、

そのまま一緒に歩く三久ちゃん、まるで接着剤でくっついてるみたいに。

「・・・トイレについたよ、先に入る？」

「ううん」

「じゃあ、僕が先に入っている？」

「・・・ううん」

「まさか、一緒に！？」

「そうです！おにいさま、入りましょう」

「ええ？そんな・・・わっ！わっ！」

「バタン！！」

「強引に中に連れ込まれた・・・」

「おにいさま、まずはこっちから？」

「何を！三久ちゃん・・・はうっ！！」

ズルッ、とパンツを下げられてしまった！

「はい、こっち向いてえ」

洋式トイレの方へと体を向けられる・

「よ、幼稚園児じゃないん・・ああう!」

きゅっ、と僕のペニスをつかむ三久ちゃん!

「さあ、出してくださいあい」

「そんな・・あ・・もみもみ、しないでえ!」

恥ずかしい!!

三久ちゃんに、おしっこ出さされるなんて!

おしっこ出るとこ、見られるなんてえええええ!!

じよばじよばじよばじよばじよば……

「くすっ、おにいさま、ちょっと大きくなってるっ」

「ああ……う……うああ……」

顔が真っ赤になる僕、

三久ちゃんにおしっこさせられてる……

出してる最中もおしそつにもみもみしてる三久ちゃん……

ぶるぶるぶるっ、と痙攣して出し終えろとちゃんと雫を切ってくれる、

僕は思わず大きなため息を漏らした、こんな……恥ずかしい事されるなんて……

「次は大きい方ねえ、座ってえ」

「それはさすがに……はあっ!」

「す・わ・っ・て」

背中をつつーっとなぞる三久ちゃん、

へなへなと腰が落ちる・・降ろした便座にすわらされる・・

パンツを降ろしたまま・・三久ちゃんの腕が下腹部に伸び、腸を揉み押しはじめる！

「うああ！で、出る！やめて！う、うああ！！」

「おにいさまあ、出してくださいあい、ほらあ！」

「やめ！もう、もう・・こんな・・はああああああ！！！！」

・・・ああ、三久ちゃんにまた新たな面で犯された・・・

今度は三久ちゃんが僕と入れ替わって用をたしている・・・

まさかトイレまで一緒だとは、さらに、三久ちゃんに、出さされるなんて・・・！！

「おにいさまあ、終わったよお」

「うん・・行こう、汗かいたからお風呂入りたいな・・」

「もう沸いてるよお、ばっちりい」

「じゃあ・・・一緒に？」

「もちろんです！着替えも、もう置いといたのお」

また、ぴったりと僕の体にくっつく三久ちゃん、

まさに一心同体といった感じで・・なんだかある意味、犯されてい
る・・

こうやって普通に歩いてても、ここまでぴったりくっつかれると、
心身ともに侵略されてるようだ。

ガラッ

「はいおにいさま、脱がしてあげますっ」

「うわっ、いきなり！」

有無を言わず僕の服を剥ぐ三久ちゃん！

何だか全てが三久ちゃんペース、三久ちゃんの思うが儘だ、

それに抵抗できず言いなりになって脱がされる僕・・・僕も三久ちゃん
の服を脱がす、

僅かな膨らみの胸がぷるん、と震えると、ベットであれだけの事を
してきてもやっぱりどきどきする、

幼い割れ目だって・・・恥ずかしい・・・あらためて顔が赤くなってき
ちゃうよ・・・

「おにいさま、洗わせてくださあい」

スポンジで丹念に全身を洗われる、

丁寧に丁寧に・・・これがまた、なんとも言えず、

「あひゃひゃ！く、くすぐったいっ！！」

「もうすっかり敏感・・・おにいさま、気持ちいいでしょ？」

「う、うん、でも、あひゃ、ひゃひゃひゃ・・・」

三久ちゃんは特にくすぐったくなる場所を念入りに洗う、

首筋や脇の下、背筋はもちろん竿や玉やおしりの穴までも・・・

いつのまにか体を密着させての全身ソープへと移行する、くすぐった気持ちいい！！

「はう！あう！三久ちゃん！いい！気持ちいいよお！！」

「いいでしょう？おにいさまの体はもう、絶対にくすぐったくないと気持ち良くなれないんですからあ」

「いつちゃう！もう、いつちゃうよお！！」

ピクピクと震える勃起したペニス、

このまま三久ちゃんに・・・と思った直後、

ぬるぬるの体での全身ソープが止まった！！

「あっ！？三久ちゃん？」

「おにいさまあ、今度は三久も洗ってえ」

「・・・う、うん・・・」

スポンジを受け取り、

すでに全身泡だらけの三久ちゃんを、

丹念に洗う、細かいところまで・・・小さな体を・・・

ピン、ピンとたった乳首も念入りに・・・ピクン、と震えて感じる三久ちゃん・・・

僕は抱き着きながら、スポンジを幼い股間の割れ目へ伸ばす・・・

ここに僕はゆつぶ、とうとう入れられて、犯されたんだ、ついに・・・

まだ全然幼い割れ目なのに・・・きゅっ、きゅっ、きゅっ、とスポンジでやさしく速くこする・・・

「はあん！おにいさま、気持ちいいっ！！」

「いいかい？じゃあ、もっと……」

$\mu \leq \nu$, $\mu \leq \nu$, $\mu \leq \nu$, $\mu \leq \nu$. . .

「あん！はん！ああ！おにい！さまあ！ああ！あああ！」

こんな小さなあそこに僕は・・僕は・・

「あああああああ————！！！」

くたつ、と力無く僕にもたれる三久ちゃん、イツたようだ……

7日目〔3〕

「三久ちゃん、大丈夫？」

「うん・・・おにいさまあ・・・」

きゅっ、きゅっ、きゅっ、と、まだあそこをこすってあげる・・・

余韻に浸りながらも次の快樂の並みに飲まれる三久ちゃん・・・

「好きなおにいさまとのHって、もう最高ですう・・・」

「僕もだよ、三久ちゃんに犯されるのが、もう、やみつきだよ・・・」

「ずっと、一緒に・・・はあ！ああああ！..」

ぷしゅ、ぷしゅ、と潮を吹く三久ちゃん・・・

ぎゅうつ、と僕のスポンジを持ってない左手を掴む・・・

僕は三久ちゃんの長い永いくすぐりを真似するかのよう^にに割れ目をこすり続けた・・・

「おにいさまあ、三久、いきすぎちゃって、変なお・・・」

「・・・じゃあ、あまりやりすぎて腫れちゃつと駄目だから・・・」

ようやくスポンジを三久ちゃんから離す、

すっぱりまどろみきつた三久ちゃんが僕の胸に抱きつく・・・

「さ、お湯で流して湯船に入ろう」

「うん・・・おにいさま・・・好き・・・」

唇を重ねてくる三久ちゃん・・・

小さな舌に応える僕、深い深いキスを楽しむ・・・

ああ、僕の勃起したままのペニスがそろそろ我慢できなくなってきた・・・

「その・・・僕も、いきたい・・・」

「んふ、おにいさま・・・お風呂の中で・・・」

「うん・・・」

一緒に湯船に浸かる、

三久ちゃんは僕の座った向かい側に座る・・・

え？これじゃあ入れられない、と思うと足を捕まれて・・・

「ああう！三久ちゃん、それは！！」

「ふふ、おにいさま、ここも感じる？」

僕の伸ばした両足を軽く広げられ、

その間に三久ちゃんの右足が入り、指が付け根の、僕のお尻の穴に
い！

ああ！指を動かして僕の股に割って入って、袋や穴をいぢってるう
！足の指でえ！！

「それは、そこはあー!」

「感じるでしょうっ?こちょこちょこちょ」

「ひああ!ああ!ああああ!」

肛門を細かくくすぐられてるう!!

いっちゃう!い、いっちゃうよおお!!

「あひ!三久ちゃん!いい!いいっ!」

「おにいさまのそのとろな顔、素敵」

ガクガクガク、と突っ張った足が震える!

三久ちゃんはさらに足を食い込ませて袋や肛門をくにくにと!

いく!肛門から貫かれる快感が!そのままペニスに!くすぐったく
って、いくう!!

「はい、おしまあい」

「・・・ああっ!？」

スツ、と足が離れ、

ちやぷつ、と湯船の中で身をひるがえし、

僕の膝の上に座る三久ちゃん・・・ああ、もうちょっとでいきそうだったのに・・・

「三久ちゃんっ!!」

「あんっ!!」

後ろから抱き付く僕・・・

綺麗な背中、幼くって美しい・・・

このぴちぴちした肌も、全部僕のものなんだ・・・

「もう、もう、我慢できないよ・・・」

「えー、あとでえー」

「そんな・・・もう、じらさないで!!」

ザバツ、と三久ちゃんの体を持ち上げ、

はちきれそうな僕のペニスを三久ちゃんのおそこへあてがう!

「いいよね? いいよね? もう、入れるから!」

「ああん、おにいさま強引」

三久ちゃんのちいさなおそこを狙いを定め、三久ちゃんのおしりを僕の腰へ沈める!

・・・くにつ、くにつ・・・

「あ、あれ? あれ?」

は、入らない!?

うまく、入れられない・・・

いててて! ペニスが、お、折れちゃう!!

「おにいさまあ、三久があとでちゃんと・・・ね?」

「はあ、はあ・・・がまん・・・で、できない・・・」

入らないもどかしさで息が荒くなる僕、

出したいのに、入りたいのに、うまくいかない!!

ザボッ!!

「三久ちゃあん!!」

「ああん!!」

僕はお湯の中で膨らみきったペニスを三久ちゃんの体に擦り付ける！

前はこれでイケたんだ、今度も・・・ああっ！三久ちゃんのすべすべお肌、気持ちいい！！

とろけるう・・・これならすぐに・・・うう！い、いけるはず・・・い、いいっ！あ、はあ、あああ！！！！」

「おにいさまあ、おにいさまあ・・・」

ぎゅっ、と三久ちゃんも僕に抱き着く・・・

密着され、相当気持ちいいんだけど・・・だけど・・・だけど・・・

「はあ・・・はあ・・・み、三久ちゃん、い、いきたい・・・」

「おにいさま・・・いっていいよお・・・」

「いきたい・・・いきたい・・・気持ちいいのにい！！」

いけない！！

射精できない！！

こんなに気持ちいいのに、後一步足りない！

何が足りないかはわかりきっている、そう、三久ちゃんの・・・

三久ちゃんの指先から僕を狂わす魔のこちょこちょ、くすぐったさが足りない！！

「三久ちゃん！お願い！くすぐってえ！！」

「ああん！お風呂出たらあ、あとでえ・・・」

「そんな！そんな！今すぐう！！！！」

何度も何度も三久ちゃんの胸やあそこにこすりつけたものの、

かわいらしい乳首でペニスを擦っても激しい快感はしても射精できず、

あそこに入れようにも、どうしても、なぜかはめる事ができない！
できない！！

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「もう出ようよお・・・」

「う、うん・・・出よう・・・だから・・・ベッドで・・・」

三久ちゃん、どうしてもすぐつてくれないんだ？

切ない・・・もう身も心も手に入れてしまえば、一生懸命してくれないのか？

結婚するって決まってしまうえば冷たく・・・そんなの嫌だ！三久ちゃんに、捨てられたくないよお・・・

「三久ちゃん、三久ちゃん・・・」

「おにいさま、パンツ履かせてあげるねえ」

かいがいしく服を着せてくれる・・・

ああ、ペニスが射精寸前のまま、びくんびくんしてる・・・

ベッドで・・・ベッドへ行けば、三久ちゃんはきつと、あの狂うほど

の快感を!!

「おにいさま、どうしたの？ベットでバンザイしてえ」

「三久ちゃん、はやく・・・はやくう」

「はやく、どうしてほしいんですかあ？」

「意地悪しないで・・・はやくうう！」

「ふふっ、おにいさま、お風呂でわかったでしょう？おにいさまったら、

おにいさまの方からしようとしても、もう、いけない体なんですよ
お」

「やっぱり・・・僕はもう、三久ちゃんに犯されないと、駄目・・・」

「そうですね、それでおにいさま、三久にくすぐられたいんでしょうっ」

「うん！うん！うん！うん！」

激しく首を縦に振る僕・

「よーくわかってくれたおにいさまには、ご褒美ですっ」

さつき着たばかりのシャツやパンツをなすがままに脱がされ、

じゃらっ、と2つの手錠で僕の両腕をベットにガチャリと・・・

「おにいさまのこれ・・・もうたいへえん」

「はあっあっあっあっ!!」

ピンツと勃起したペニスを軽く揉む三久ちゃん・・・

先から透明な汁がトロトロと!中の濃縮な精液が待ちきれない!!

「三久ちゃん!お願い!は、はやく!!」

「じゃあ!ほっぴ・・・じゃーん!!」

ベツトの下から取り出したのは・

長い棒に茶色い鳥の羽根のやわらかあいのがいつぱいついた、

あの、車の中の埃とか掃除する、めっちゃくちゃくすぐったそうな、
あのー！

「ひいつー！」

ぐいん！！とペニスがさらに膨らみ、

ぴゅっ、と軽くカウパーのみが吹き出る！

見ただけでそのくすぐったそうな感じが襲い、狂わせるうっー！

「三久のものになってくれたお礼に、まずはこれでえ・ふふふ」
「ひい！ひい！ひい！」

ガチャガチャ、と手錠を鳴らし身悶える僕！

あんなの、あんなの狂っちゃうよおお!!!!

「ふふふ・・・」

手で羽根をなでる三久ちゃんは、

そのまま三久ちゃんのパジャマのシャツの中に突っ込む・・・

「はああ・・・気持ちいいよお・おっぱいの先が、ぴくんぴくんする
う・・・」

目がとろける三久ちゃん・・・

自分でやってそんなに気持ちいいなら、

されたらどうなっちゃうんだろう・・・ああ、されたい!!

「おにいさまあ、まうは軽うく・・・」

羽根が近づく！ひひひひひい！！

10.

「あひゃああああ——！！！」

首筋から胸を羽根の束がやさしくなぞる！

とろけるようなやさしくすぐたさが突き抜ける！！

駄目！これだけで、これだけで、もう、いっちゃんそうだあああ！！

「ねえおにいさまあ、好きって、言ってえ……」

「ひいひいひいひい・・・」

「三久の事、好き、って一言言ってくれるたびに、これで一回づつくすぐってあげますう」

ゆーら、ゆーらと僕の胸の上で羽根の束を揺らす・・・

「ほらあ、おにいさまあ・・・」

「う・・・す・・・すぎっ」

ふわさあっ

「あひい！」

僕の乳首を軽くひとなで・・・！

ピクンツと乳首が激しく勃起し僕の股間からもカウパーがさらに強く吹き出したようだ！

「ちゃんと三久の名前、言ってえ・・・」

「うん、三久ちゃん・・・好き」

さわあぁっ

「ひゃあ！」

「もっともっととお」

「好き！三久ちゃん、好きっ！」

さわっ！さわさわっ！！

「あひゃ！ひゃあぁあぁ！！」

僕の乳首を左右行ったり来たりしてくすぐる！

気が遠くなるような快感！もっと、もっと味わいたい！！

「100回行ったら100回、1000回言ったら1000回くすぐってあげますよお」

「ああ、あ、ああああ・・・!!」

僕はもう、その危険で妖しい誘惑に逆らえない!!

最終話 かな・・・・・・・・

「好き！三久ちゃん好き！好き！大好き！三久ちゃんが、好き好き好き好きだいすきiiiiiiii！！」

さわさわさわさわさわさわさわさわわわ！

「あひゃ！ひゃひゃあ！しゅき！しゅき！しゅき！みくちゃああん！しゅきしゅきしゅきいい！しゅき！すっ、すっ！すきいい！

だあいっすきい！すき！絶対好きっ！しっ、しぬほどっ、す、すきいいい！！好き好き三久ちゃん好きiiiiiiii！！」

さわさわわっ、つつーっ、こちよこちよこちよ・・・・くりくりっ、さわさわわ・・・・・・・・

ふさふさふさ、さささささーっ、さぶさぶさぶさー・・・・くしゃくしゃ・・・・さわさわっ！

「いーーーーっ！三久ちゃん！すきーーーー！」

叫べば叫ぶほどくすぐりが激しくなる！

駄目だ！こんな状態で三久ちゃんの事を「好き」って大声で言わされ続けたら、

脳が快感にやられて、刷り込まれて一生、三久ちゃんしか好きにならない、絶対に！！

そこまで計算して！？恐ろしい・・・絶対、一生、逃げられない！三久ちゃんしか、駄目だああ！！

くすぐりたい！気持ちいい！三久ちゃんを好きって叫ぶのがやめられない！言えば言うほどくすぐられる！

そしてくすぐられればくすぐられるほど、もっとして欲しくて叫んでしまう！地獄の永久ループにはまるうう！！

「すきーーーー！三久ちゃん好きーーーー！三久ちゃんがーーーー！好き
いいーーーー！！」

「ほおら、言えば言うほどくすぐってあげますよお、ほおら！」

さわさわさわさわわーーーー・・・

脇の間もこしょこしょと！太股も！耳も首筋もうなじも！

まだ射精してないのに全身のくすぐったさが射精以上の快感で責める！

こんなんで射精しちゃったら、おかしくなるう！気が、気が変になつて、壊れるうつう！！

「好き好き好き！ずぎい！みぐぢゃあああん！ずぎい！すつぎい
いいい！！」

「おにいさま、唾が雨みたいに飛んでるう！ふふ、もっと三久を好き
きつて言つてえ」

「ぢゅぎい！みぐぢゃん！ぢゅぎじゅぎいぎひゃああああぢゅぎ
ぎゃああああ！！！」

こつ、こんなになつてるのにまだ「好き」と言う事を要求する三久
ちゃん！

それはすなわち、よりもつと僕に快感を焼き付け味あわせようとす
る残酷な宣告！！

悪魔のような、いや、まさに淫魔のような三久ちゃん！こんな事が一生続くなんてええ！！

「ねえおにいさまあ、ほんとに三久の事、好き？」

「ぢゅ……ぎ……ぎい……み……ぐ……ぢゃ……じゅぼ
じゅぼ……」

すでに僕は泡を吹いている……

「喋れなくてもわかりますよお、もっともって好きって言うてくだ
さあい」

「ず……いい……ぎゅ……が……ぎゃあ……」

「んふ、じゃあ、いかせてあげますう、だから言い続けてください
ねえ、三久を好きだってえ」

くすぐりまくっていた羽根の束をスツと僕の股間の方へ……！！

あまりの刺激に股を閉じた僕、羽根の棒が股の一番奥に挟まる、するとそれを逆手にとって羽根棒を縦に上下に挟まつたまま出し入れさせるう！

下からおしり、袋、竿とくすぐったさで突き上げられて竿、袋、お尻と突き下げられてえ！

「いひ！いひいひ！！」

[illegible]

凄まじくくすぐったい快感！

激しく羽根が肛門・袋・竿を同時にくすぐりなで擦るう……

[illegible][illegible]

「あん！出るうー！すっごい量・・・もっと出していいですよー！..」

じゅじゅじゅじゅじゅ・・・じゅるじゅるじゅるじゅるじゅる！..！

「ひい！みぐちゃん！それわあああああ！..」

さらに！羽根棒をくるくると回転させながら上下させる三久ちゃん！

さらなる技が加わり快感が倍増する！残酷に射精させられ続ける液は勢いを増していくうー！

びゅるー！びゅうー！ぶしゅぶしゅしゅうつうつうつ・・・

じらしにじらされた精液が決壊している・・・

脳がスパークしている・・・ひい・・・羽根も僕の精液で濡れている・・・

三久ちゃんの全身にもすごい勢いの精液が飛び散って・・・でも色っぱい表情だ・・・

淫魔の表情で僕を責め続ける・・・ああ！神経が焼き切れそうだが、気持ち良すぎてえ！

でも、でも、もう耐え切れないのに・・・口が、僕の口が勝手に動いて・・・これを、一生言わされ続けるう！！

「す・・・すきい・・・みくちゃん・・・す・・・すきい・・・」

「おにいさま、こんなになっても言ってくれるのねえ、うふ、三久嬉しい！」

「・・・す・・・き・・・ず・・・ぎい・・・み・・・ぐ・・・ぢや・・・」

びゅるん、びゅるん、びゅっー！！！！・・・

一生、一生言わされるっっっっ！！！！

そうか、毛バタキっていいのか、この羽根の棒・・・

に、2時間も・・・僕は2時間も射精しっ放しだったのか!?

途中からはもうほとんど出なかったんだろうけど、でも2時間も絶頂を・・・!!

完全に絶頂の世界にトリップしてしまっていた、あのまま悶絶死してもおかしくないぐらいに・・・!!

恐ろしい・・・おそらく三久ちゃんがその気なら2時間どころか12時間、いやもっと、2日連続でも!

「でもおにいさま、まだ元気なままですよ」

「あうっ!」

ぎゅむっ、とペニスを握る三久ちゃん、

まだ勃起したまま・・・あんなに出したのに・・・

痺れて痛い・・・やわらかく、くすぐりなでられ続けただけなのに・・・

「結婚できるまで、危ない日はこつやって空っぽにしてから三久の中に入れるねえ、」

えへっ、おにいさまあ、三久、かしこいでしょう？今日はほんとに安全な日だけとお

「う・・・ああ・・・や・・・」

何とか「やめて」と懇願しようとする僕、

だが、快楽絶頂責めのあげく狂わされた僕の脳が命令して出させた言葉は・・・！！

「・・・ぐ・・・す・・・すきい・・・三久ちゃん・・・好きいい・・・」

「きゃは！おにいさま、やっぱりくすぐられながら入れられたいんですねえ」

「ち・・・がぁ・・・す・・・すき・・・すきい！！」

駄目だ！！

僕はもう・・・

もう完全にやられてしまっている！！！！

「ぢゃあ、また入れたら同時にい・・・んふふ」

・・・やっぱりもう僕は、

月に騙されて捕まった瞬間に、

全てが終わってしまったんだ、

捕まってくすぐられた時に完全に三久ちゃんのものに・・・

今、僕はそれを認識させられているんだ、あきらめてはいたけど・・・

「ふふ、おにいさまあ、唇がずっと『す・き』って動いてますよお」

・・・でも、でもここまで残酷なものだとは！

こんなにまで僕が狂わされていたなんて！！！！

これが「人生を奪われた」って事なんだ、この可愛いらしい少女に・
・・!!

騎上位の体制で両手をわなわなと僕の両脇へ伸ばす三久ちゃん、

くにつ、と僕のペニスをあそこにつけると右手を戻して割れ目に先
を入れ、

再び僕の脇へ・・腰が沈んでいく・・指が動きはじめる・・ああ、
これが毎日、毎日、エンドレスでええ!!

ずいゆ、ずいゆにゆにゆにゆ・・・

「こちよこちよこちよこちよこちよ・・・」

「すつ、すうー、すきいいー! ! !」

ビクン、ビクンと僕のペニスは何度も何度も空打ちを続けた、

痛いほどの快感をペニスに感じ、永遠とも思える時間、くすぐった
さに悶えながら・・・

「ただいまー．．あら？三久、有人さま．．．」

「ん？どうしたんだ？あ！えらいいちゃついでるんだな」

「お姉ちゃんたち、おかえりなさい！」

「お、おかえり．．なさい」

「羨ましいくらいべったりですね」

僕は三久ちゃんと居間でテレビを見ながらたべたといちゃついていた、

それを帰ってきた一美さん、二恵さんに見られた．．ま、見られたからってどうでもいいか、

気にすることなく、もっともっといちゃついでよう、そうしてない

と僕が我慢できないや。

「三久ちゃん、好きだよ」

「おにいさまあ、私もあ」

「まあ！では有人さま、三久と結婚してくださいそうですね？」

「よかったな、三久、憧れの有人さんを手にできて」

「うん！おにいさま、もう離れちゃ駄目だよあ」

「う、うん・・・三久ちゃん、好き・・・好き・・・好きだよ」

「私もあ・・・有人おにいさまあ・・・好き・・・」

こうして三久ちゃんは本当に僕から離れなかった、

朝から晩までどこるか晩から朝まで、食事もお風呂もトイレも、
接着剤でくっついているかのようにぴったりとくっついて離れよう
としない、

うっかり離れてしまいそうになるとすぐにくすぐり攻撃にあい、へなへなと倒れ込んでしまう。

通常ならノイローゼになる事間違いないというぐらいだが、今の僕にはこれがたまらなく心地よい。

僕にプライベートはもうまったくくない、全て三久ちゃんが一緒・それは三久ちゃんにも言えるのだけど。

唯一、仕方なしに別々に別れる学校での時間が逆に僕にとっては苦痛に感じはじめている、三久ちゃんがいないから・

とはいっても休み時間のたびに携帯電話でお互い連絡を取り合っているから、しっかりと見張られてはいるんだけど。

そして真つ先に家に帰って三久ちゃんとぴったり寄り添う・

帰ったら帰ったで仕事が待っている、正式な婚約により正式な美麗家の家族となった僕は、

あちこちのうちの財閥関係各所に顔を出し援助を頼んだり三久ちゃんのお父さんと一緒に時には自ら交渉したり・・・

菱大路家の直系が婿に入った美麗家は今までとは比べ物にならないほどの信用・信頼と資金を得た、

僕が婿に入った事によりうちの、いや、菱大路家への莫大な借金は

もちろん返さなくても良い事となり、

それ以外の借金も僕の婿入り金だけで返せたところか逆に今までの借金額以上のお金がプラスになった、

たちまち美麗家は菱大路財閥のナンバー５の大家になってしまったのだ、政略結婚ひとつで・・・

長い間、暇を出していたメイドたちも美麗家に帰ってきた、

三久ちゃんも教育係も戻ってきたようでとっても喜んでいる、涙を流すほどに。

一美さんは食事を作らなくてよくなるのが少し寂しそうだがたまに手伝っている、

二恵さんは家を出ていくとか言っていたくせに家が金持ちに戻るところか大金持になったため、

やっぱり居心地がよくなって今では僕におべっかを使うほどだ、まったく現金なものだ。

ほとんど家に帰ってこれなかったお義父様とお義母様も実は過労でそうとう痩せていたそうだが、

今では家にすっかり落ち着いている、もう走り回らなくても仕事は向うから来てくれるからだ。

やはり資金がモノをいうこの世界、その資金さえあればお義父様の元からあつたビジネスの才能で、

どんどんどんどん大きな仕事を楽にこなしていく・・・僕もたまに顔見せして手助けしている。

三久ちゃんは日に日に成長していく、

それは美麗家を継ぐ僕の妻としてふさわしく勉強していくのもあるが、

ベットでの性のテクニク、そしてくすぐりのテクニクを貪欲に学習・上達させていった、

僕がくすぐられ慣れていなかったら100回は発狂悶絶死していただろうぐらいに・・・

おかげで今や三久ちゃんに死の寸前までくすぐられ犯されないと満足できない体にされてしまっている。

こうして半年が過ぎた・・・

「三久ちゃん・・・好き、好きだよ・・・」

「有人さまぁ・・・」

日曜の昼下がりに、窓辺で三久ちゃんを背中からぎゅっと抱きしめる僕・・・

「ほら三久ちゃん、鳥が鳴いてるよ・・・」

「本当・・・いい声ですねえ・・・」

「・・・三久ちゃん、幸せの青い鳥って知ってる？」

「知ってますう・・・」

「・・・青い鳥を手に入れた人は幸せになれるっていうけど、捕まった青い鳥は・・・幸せなのかなぁ」

「うーん・・・きっと幸せですよ」

「どうして？」

「きっと、捕まっても幸せな声で鳴いてたはずですから」

「そうかな？」

「そうですよ、こんな風に・・・こちよこちよこちよ」

「あひい！三久ちゃん！くしゅ・・・くしゅぐった・・・あひい！！」

「有人さまもいっぱい、いっぱい、幸せな声で鳴いてくださいね」

「あひゃああ！三久ちゃん！あひゃひゃあ！す、す、すきい！三久ちゃん、好きい！」

「ふふふ、お夕食までこのまま・・・こちよこちよこちよこちよこちよおー！」

ああ、僕はこうやって・・・一生、幸せな鳴き声を奏で続ける・・・くすぐりの檻の中で・・・！！

「あひゃ！あひゃひゃ！あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃあああああああー！！！！！！！！！！」

最終話ゝかな・・・・・・・・・・（後書き）

一応一日係で無理やり完成・・・・・・・・

雑な仕上がりですがご勘弁を。

続編を考えてますが時間が掛かりそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0483z/>

くすぐり天国・甘甘地獄

2011年12月1日22時02分発行